

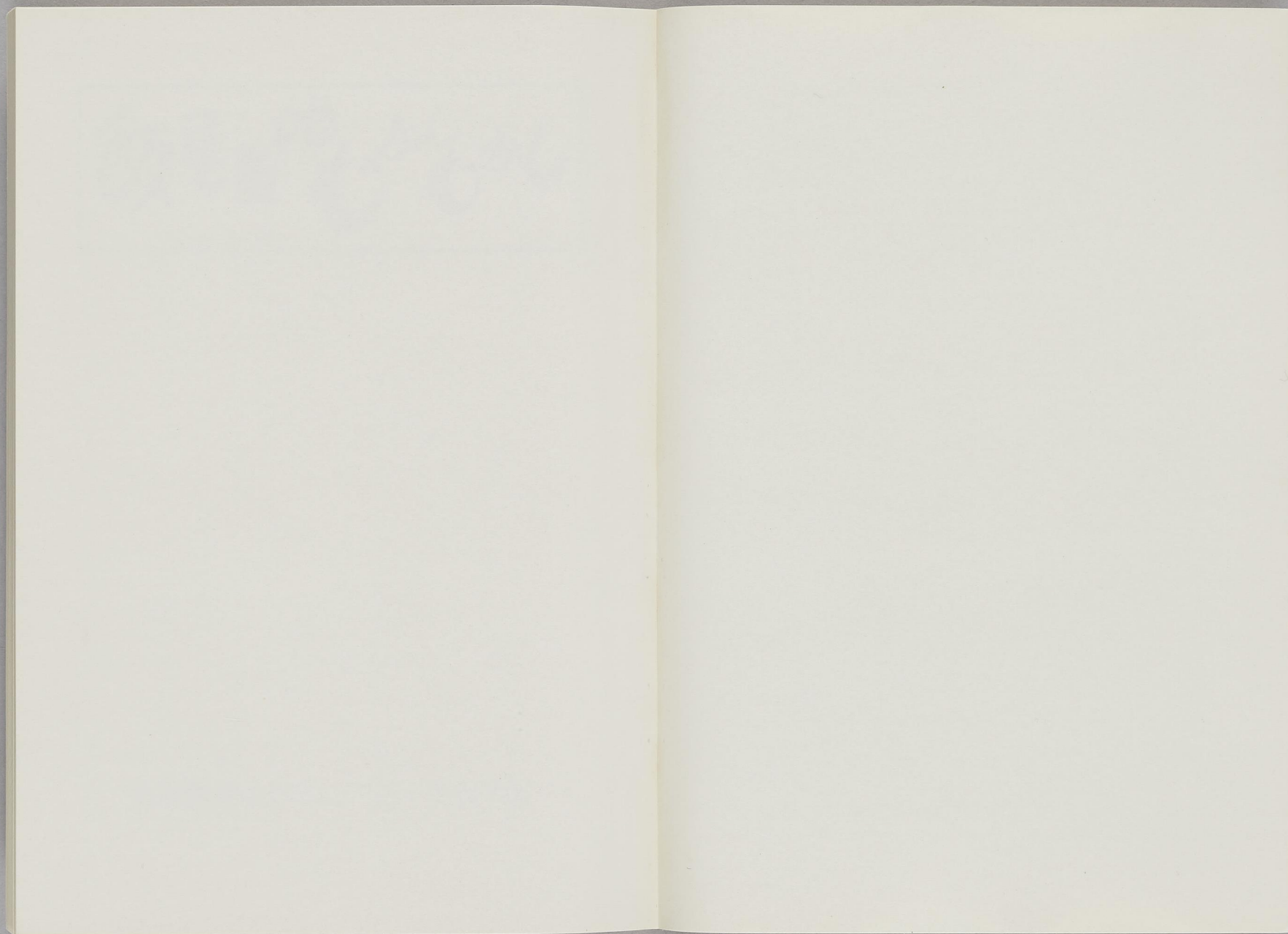
飯尾敷地むかしむかし



飯尾敷地ふるさと大学～歴史学部









飯尾敷地むかしむかし

飯尾敷地ふるさと大学～歴史学部



## 発刊を祝して

鴨島町長 久保 農夫也

私たちの現代の生活は過去につくられた文化の上に成り立っているものであり、先人が営々として築いた文化遺産の恩恵は如何に現在の生活を豊かにしているかはかり知ることができないものがあります。

こうした意味から、やゝもすれば忘れられたり、資料が散逸してしまふ郷土の歴史をたずね、それらを明らかにし、後世に伝えようと、郷土歴史書をつくられたことはまことに有意義であり、そのご労に深い敬意を表するとともに、発刊を心から祝福いたします。

飯尾敷地は、本県でも数少ない縄文遺跡をはじめ、弥生時代や古代古墳時代の遺跡も多く、早くから文化の開けたところでもあります。さらに、呉郷は大陸からの帰化人の伝授に始まる織布文化の発祥地であり、飯尾常房をなじめ歴史上著名な人物を多く出しています。近代になつても東郷学校や



呉郷文庫など学校教育や社会教育の施設が県下の先陣を切って開設され、現代は大規模な住宅団地として呉郷団地が建設され文化的躍進はすばらしいものがあります。

このようにすぐれた文化的遺産をふまえた当地域の方々は先輩の志をつぎ、さらに大きく文化創造に向けて活動を展開されているのでありますが、特に天寿会の方々は深見定一氏を中心に「ふるさと大学」を開設して政治、経済、文化、同和教育など近代的学習に大きな成果をあげられています。その中で歴史学習が実を結んで本書の刊行となったものと承っています。

従って、本書の特色とするところは内容が文献や他の書物の書き写しでなく、どこまでも自らの足と頭を働かせてまとめあげられたものであるということです。

この企画と過程は尊いものであり、内容も具体的に地域の実際が記述されているものとして高く評価されることと信じております。

終りにのぞみ、書が広く愛読せられ、郷土愛から郷土発展への活動意欲を高めていただけるけるものと心から期待してお祝いの言葉といたします。

### 発刊によせて

戦後価値観の多様化と高度な経済成長をとげたわが国の社会では、ともすると物質生活やレジャーへの傾斜が加速を増し、美しいふるさとの山河や、あたたかい人情など、自然や精神的な文化を軽視する風潮が高まり、物で栄えて心で減んだ古代ローマの轍を踏んではならぬと警告の声さえ聞かれるようになりました。今日、郷土史の研究や編集が脚光をあび、文化財の見直しや保護事業が重要視されるようになったのはこのような時代背景によるものと考えられます。

わが畏敬する郷党の先輩深見定一氏は同志とともに「ふるさと探究」を計画され、ひたむきな情熱をかたむけられご高齢の身をいとわず、山に川に、森に里に、くまなくふるさとを踏破して資料を収集されこれを集大成して遂に「飯尾敷地のむかし」を刊行されました。

「ふるさとを見直し」「ふるさとに生きた先人をしのび」「ふるさとを愛し、ふるさとを後世に伝えよう」と決意もかたく努力を惜しまなかった氏の慧眼と労作に心から敬意をささげるものであります。



この研究調査は、「飯尾敷地ふるさと大学、歴史学部」の研究事業として進められまとめられたものですがその前身である飯尾敷地老人大学の創設と同時に着手され約三ヶ年の長期にわたって意欲的に継続され完成されたものと伺っています。その内容は、先人が生きる心のささえとなつた神さまや佛さまの信仰のこと、生活にうるおいをもとめた遊びや年中行事のこと、教訓に満ちた伝説や、地名のいわれ等、ふるさと遺産の確認であり、うばわれていたふるさとの偉大な蘇生でもあります。いつの日か誰かの手によってなし遂げられなくてはならなかった「ふるさと傳承の偉業」なのです。この貴重な資料によって多くの方々が「ふるさと」をもつことの幸せをかみしめ、「よりゆたかな「ふるさと」へと連帯感を高めて、住みごこちよい町づくりにたのしい日々を過されますよう願つてやみません。

終りに、産みの苦しみを見事のりこえ、「ふるさと蘇生」をなしとげられた深見定一兄の一層のご健康とご発展をお祈りして擲筆いたします。

昭和五十四年二月十五日

鴨島町教育委員会

教育長 深見良雄

## はじめに

ごあいさつ

運営委員長 深見定一

今日、人類は月の世界までも第一步を踏みいれ、夢であつた鳴門のうず潮のうえを越える架橋が実現されるように、明治生れの私たちには想像も及ばなかつた著しい進歩を遂げている。しかし自然破壊が叫ばれ、人間疎外が問題化していることは何か大切な忘れものをしているのではありませんか。このような現代社会の忘れものを少しでも明らかにするためには、一人一人がふるさとのことを吟味して、現在から未来への正しい展望をもつことが必要であり、それが最も近道ではありませんまいか。

私たちの飯尾敷地にあつても、マンモス団地が誘置され、次第に農村的性格が失われていくなかで、自治省からモデル・コミュニティーの地域指定に預かり、さらに町当局のご努力で近代的なセンターが建設されました。地区民はこれを融和の道場として、積極的な仲間づくり活動を展開し、心の交流を深めているのであります。それらの代表的な学習事業がふるさと大学なのであります。



とりわけ歴史学部は老人が大半を示めていることから、手がけ易い昔の村の姿と歴史伝説などを探究することを提案したところ全員が、「そりやええ、賛成」と即座に目を輝やかせたのであります。そして結果をまとめ書物にしておくならば「温故知新」の名句の意味と照しあわせて、必ずや後世に参考になるものと、毎月一回の学習日に、各人が主体的に調査事項を発表する営みを続けてまいりました。いつのまにか二年半を過ぎ、ここに本書を送ることができたのであります。

しかし原稿完成のしだいで、今一步掘り下げて調査すればと不備事項を見出した数々があります。が、これは司会した私の力不足であり深くお詫びすると共に、次代の方々の補訂をお願いする次第であります。

なお、この学習に鴨島町教育委員会ならびに資料提供の各位に暖かいご指導ご援助を頂きました。ご厚意を深く感謝申し上げます。

昭和五十四年二月十一日

## 目次

発刊を祝して

発刊によせて

はじめに

### 第一章 ふるさとの歴史

飯尾の村づくりの歴史

飯尾敷地から出た土器

### 第二章 ふるさとの神々

飯尾の天神さん

天神社にまつわる実話と伝説

天神社境内に祀る神々の伝説

敷地の氏神さん

その他の神々

### 第三章 ふるさとの寺

飯尾高ノ原岡寺（福生寺）の歴史

河辺寺

宝幢山持福寺

四国霊場第十一番の藤井寺

報恩寺

地藏さん

庚神さん

金比羅さん

### 第四章 ふるさとの地名と伝説

飯尾

敷地

飯尾の地名



# 第一章 ふるさとの歴史

|                   |     |                   |     |
|-------------------|-----|-------------------|-----|
| 敷地の地名……………        | 115 | 阿波の素人淨瑠璃……………     | 213 |
| 蜂須賀公のお鷹野狩り……………   | 120 | 第九章 ふるさとの人物史…………… |     |
| 第五章 昔の村の生活の姿…………… |     | ふるさとの人物史……………     | 219 |
| 昔の村の生活の姿……………     | 127 | 名人・まぼろしの人……………    | 227 |
| 村の若連衆の行事……………     | 142 | 第十章 ふるさとの狸の話…………… |     |
| 第六章 昔の村の年中行事…………… |     | ふるさとの狸の話……………     | 239 |
| 村の年中行事……………       | 151 | 経過報告……………         |     |
| 第七章 昔の子どもの遊び…………… |     | あとがき……………         |     |
| 昔の子どもの遊び……………     | 167 |                   |     |
| 第八章 ふるさとの歌……………   |     |                   |     |
| ふるさとの歌……………       | 187 |                   |     |
| 俳句活動の概略……………      | 205 |                   |     |



## 飯尾の村づくりの歴史

日本列島に人間が住みついたのは、二十万年か三十万年ぐらい前だといわれているが、鴨島の土地には、そのような先史時代に人間が住んでいたということをたしかめる資料は何もありません。

本町の人類の生存の歴史はせいぜい古くて四千年ぐらい前までしかさかのぼることはできません。本町で、人間がくらしたとと思われる一番古い跡は西麻植の東禪寺台地の麓に見つかった縄文遺跡であります。ここから三千年か四千年ぐらい前の縄文時代後期に多く見られる文様の入った土器がでてきたり、火災にかかった住居跡が発見されました。

その次に古いのが本町南部山地の台地やその麓一帯で見つかった約二千年ぐらい前の弥生式土器時代の出土品であり、ただ飯尾の平地部から弥生式土器がたのが特異な存在であります。

その次に古いのが（千年ぐらい前の古墳やその出土品でこれも南部山地の台地上に多く発見されました。



さて、人間は生活の適地を水と太陽の恩恵を得やすく、また食物のあるところ、災害の少ないところに求めてきました。

本町においても、まずこうした条件をもっている南部山地の山麓台地上に住居を定め村落をつくったものであります。

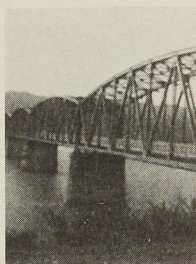
上浦の王子壇、玉取、山路の岡原、森藤の壇、飯尾の高の原、西麻植の壇の原、東禅寺台地など洪積層の段丘上に二千年から三千年ぐらい前に住居があつたことは前述の遺跡遺物によつて考えられることであります。

これは現在集落や農耕地のある平地部は吉野川の流路や氾濫原であつてとても農耕はできず、住居もつくることができなかったからであります。

飯尾地区においても、高の原から天神さんにかけての山すそ台地上に、まず住居がつくられ、村落ができたものであります。

大昔の吉野川は東禅寺台地の裾を洗つて敷地の中央、飯尾の天神さんの下を通つて、森藤山路の山ぎわを流れていたものでありまして、その時の住民は、川で魚をとつたり、山で狩猟をしたり簡単な農耕をしてくらしていたものであります。

ところがこの時代に台地の高いところから吉野川の氾濫を見下していた住民は、現在の県道筋の飯尾東部、小原、飯尾中央、北門、唐人にかけての地帯に細長く中洲ができ、これが次第に高くなつていくことに気がついたのであります。



この飯尾の中洲は本町でも多くある島、須賀の中で最も早くできたものです。これは飯尾川の上流部である樋山路や長戸の谷から流出する土砂が、中洲づくりを大きくしたと地形学から考えられます。

それでも台地上の住民は、この飯尾中洲にいち早く目をつけたのであります。本町内の平地部の中で、最も早く住宅がつくられたことは前述の弥生式土器が平地部ではここだけで発見され、ここからも合わせて考えられることであります。

なお、この飯尾の西端部敷地よりは、唐谷の放出土砂によつて、ますます高くなつて、吉野川の南流を止め、吉野川は上下島と飯尾の間の現飯尾川の流路を中心に巾広く流れていたもので、飯尾地区は独立した地域となつていたのであります。

この地域に人が住みついたのは、山地部が三千年ぐらい前で、平地部が千五百年ぐらい前からで



あることはたしかだと言えるのであります。さらに、歴史は下って千年ぐらい前になると、もう完全に飯尾はこの地方の中心の村落になるまで発展していたものであります。

このことは多くの文献にかかれていて、早くは呉服、漢服の織布文化をもってきた帰化人のこと、稲作がさかんで稲生と呼んでいたのが飯尾と変ったこと、時代は少し後になるが、豪族飯尾氏のこと、長戸から報恩寺が、阿川から持福寺がうつってきたこと、報恩寺の板碑のことなど、から大和朝廷時代・奈良・平安・鎌倉時代にかけて、飯尾はこの地方で最も進んだ社会をもつ集落であったことがわかるのであります。

日野 総一

## 飯尾敷地から出た土器

### 飯尾出土の土器のこと

飯尾神社境内や工藤茂三郎氏邸付近より土器が、飯尾敷地小学校敷地からは土器の破片が多数発見せられております。工藤邸より発見せられた土器について工藤茂三郎氏は次のように語っております。

喜田文学博士は先史時代の住民である石器民族（アイヌ種族）の使用した遺物であると鑑定され、人類学大家の鳥居龍藏氏、帝室博物館長、股野琢氏、同館学芸委員、高橋健爾氏等は日本最古の神器なる事明らかにして、名称は土器。土師。または埴輪に属して二千年以上を経たるものであるといわれています。

この工藤氏の二説の中で私は後説を適説と信じます。それは工藤邸は旧忌部の神主麻植氏の居住



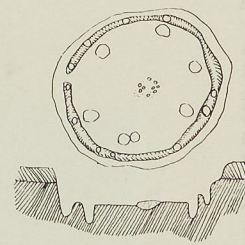
跡にして、麻植氏は忌部系統であり、同質の土器が山崎村忌部神社旧社地（黒岩）より往年発掘され、麻植氏がこれを蔵されて居ることから判断したものです。

#### 発見された石器

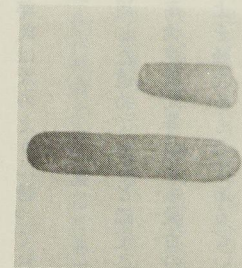
- 一、飯尾山麓丸山墓地から、明治末期に、サヌカイト製の石、ヤジリが発見され、石原育一郎さんが所蔵している。
- 一、敷地字赤坂一五〇〇番地の上で、昭和三四年五月、石棒が発見され、岡田茂市さんが所蔵している。

#### 縄文時代の住居址

西暦紀元前後にあたるこの時代の堅穴住居址と推測されるものが、飯尾の殿原で発見されている。それは大正の初期石原さんが庭土を採るため、殿原八七二番地を掘り下げたところ、深さ五〇メートルほどのところに、直径五メートルばかりの異質の土があり、そのま



住居址図



石斧・石棒 岡田家蔵

ん中の炉のあとと思われる、木炭が残っていたとのことである。

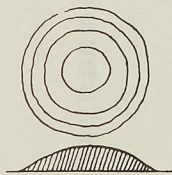
これは、たしかに堅穴住居址と考えるのであるが残念なことに現在は全く畑と化している。

#### 飯尾敷地から出た弥生式土器

- 一、飯尾字原縁・北門・唐人・福井の各地区から、各々土器の破片、漁網に用いたと思われる土錘が発見されている。
- 一、敷地、雨足神社跡から皿数個が発見され、その中の二個は日野義勝さんによつて保存されている。
- 一、飯尾小原、河野君雄さんの宅地から昭和二九年皿二個が発見されている。

#### 飯尾敷地の古墳

- 一、飯尾高原二〇〇五番地（山林）に円墳が半壊状態で現存している。



円墳



一、飯尾高ノ原一九三六番地（山林）に円墳が全壊され、その跡に小祠がある。

一、敷地山王に円墳が全壊されているが、現存している。

一、敷地呉谷（山林）に円墳が半壊されているが現存している。

一、敷地長原（西ノ宮）敷島神社参道の中に古墳が存在したとの記事が麻植郡誌にあるが現在はない。

一、敷地長原（西ノ宮）敷島神社社地の背後の丘の上に円墳が半壊されているがこん跡がある。

―追記―飯尾の野田誠作さんは西麻植東禅寺山頂墳から出た勾玉及び銀環を所蔵している。

（鴨島町誌参考）

## 第二章 ふるさとの神々



ふるさとの神々

## 飯尾の天神さん

### 天神社の由来

天神さんは古くは、大己貴命（地の神）、少名彦命（病の神）の二柱の神さまを氏神として奉祭して住民から信仰崇敬せられたと伝えられています。

年を経て、菅原道真公が九州太宰府へお下りの途路、祖父の菅原長善文章博士が阿波の守であらせられた縁故を思召されて、阿波の国へお立よりになられた。伊予街道を西へお進みの際、この社でご休息になり、周辺の風光を愛でられ、ご出発に際してご愛用の梅木の笏を社に納められたと伝えられています。

正歴四年皇室では菅公の潔白と功績を認められて贈位の詔勅が下りました。氏子はその偉勲を尊



深見定一



び当社の副祭神として奉祭してそれから火雷天神社と称し、嚴重に祭祀の誠を捧げて信仰しておりました。

明治五年にその筋から郷社の格を贈られ、近郊の七ヶ村の住民が氏子となり、祭礼も盛に行われていましたが、この氏子制度も明治廿三年に村の合併が行われました。たとえば飯尾村と敷地村と西麻植村が西尾村となり、上下島村や喜来村は鴨島村になりましたように森藤は森山にと、こんな有様で各村にも氏神を祀ることになり、いつとはなく天神さんに縁が薄くなったしで、飯尾の氏子のみの氏神になりました。

#### 天神さんのおまつり

天神さんのおまつりについては八月十五日の夏祭り、秋祭りは十月十五日に行われまして、神輿のお旅は宵祭りとは本祭りの二日にわたり、これにはお供の屋台が出ました。屋台は東郷・中郷・西郷と三台に唐人郷のヨイヤイシヨ屋台、高の原郷のアバレ屋台の五台がにぎにぎしくお供につき誠に村をあげてのお祭でした。従って、各家々では親類を客に呼ぶ賄費、屋台や神輿の試掛などのお祭りの経費など思いやられます。

この祭り行事も、明治四十年頃までの夏と秋の二度が、秋祭りだけになりました。祭日も住民の生活が藍作主体が養蚕にかわったことにより、十五日祭りは農繁期の為に二十五日になりました。また、唐人郷のヨイヤイシヨは廃止になり、中郷に合併し、高の原のアバレも廃止して東郷に合併になりました。然し、祭典行事はいぜんとして盛んで、お神輿のお旅が何日もつづいてお入りが無いので氏子はあきらめて家業に着手したこともありました。ある時などは石井町の丸石までもお旅して一泊して帰ったといふ話もあります。

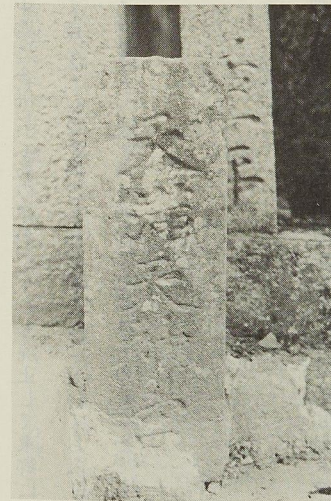
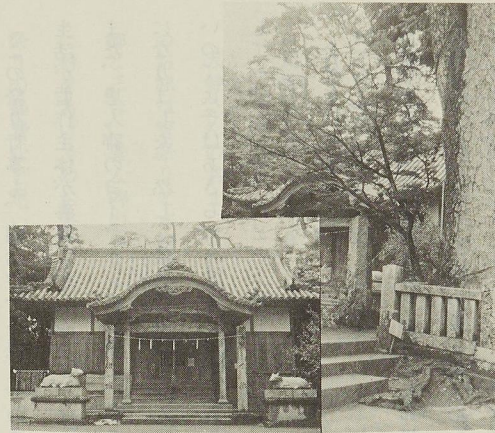
#### 合社された神々

大正四年、国の指導で神社信仰心の昂揚と神社尊厳維持の為に、各所に祭られる小宮を天神社に合祀することになり、小宮の二ツ森さん（高の原）<sup>（高の原）</sup> 賄の緒さん（東郷）<sup>（東郷）</sup> 権現さん（西郷）<sup>（西郷）</sup>の三社五柱祭神は高皇産靈神（縁結の神）<sup>（縁結の神）</sup> 火産巢火神（火の神）<sup>（火の神）</sup>

逆道若郎子神（道路の神）<sup>（道路の神）</sup> 伊井詰命（夫婦の神）<sup>（夫婦の神）</sup> 豊臣秀吉神靈（英雄の神）<sup>（英雄の神）</sup> 以上が合社になりました。この外に大山祇命は山の神さんですから、本殿から南に離れて小祠ですが、別にお祭りしてあります。



この合社に当り、西郷に飯尾彦六左衛門常房を祭神としてお飯尾さんとして祭られていた社を石原六郎氏が常房の学徳を慕われて、独力で境内を拡張し、社殿を新たに造営して、玉の示す神社の標準に従ったので飯尾神社として残りました。



飯尾の天神さん

## 天神社にまつわる実話と伝説

ご利益はたいしたもの

天神社の勤番として、大正年代から昭和四十年頃まで、神社に奉仕した野口常男さんは先代からの勤番で随分永い間勤めた。この人の話によると、天神さんに願かけをして利生を得た人数の総てを記憶していたが、こんな事を自慢気に言う。私の代だけでも相当数の方から感謝されましたと伝えております。

芝居をすると雨が降る

(北門の柴田徳一さんの話)

私の九ツの年に、夏に雨がなく耕作物は山路畑から枯れ、田も水がなくて稲が育たず、農家は大



変な困難になりました。

昔から旱魃の時には、天神社で北向に小屋をかけて、菅原伝授手習鑑の芝居、天拝山の段を上演すれば、必ず天神さんのご利益で大雨が降ると伝えられているのだから農家の者たちが提供して芝居をする事に決めました。拝殿の前に、北向に舞台を作り、村人多数が雨乞の願かけの芝居を見物しておりました。私も子供でよくは覚えておりませんが芝居が始って大分時間が過ぎてからです。空に黒雲が出てきて村人たちが大へん歓びはじめておりますと、大粒の雨が降出し、やがて大雨になりました。私は持っていたむしろを冠って、我家へ走って帰ったことを覚えております。

農家の衆は天神さんのご利益があつたところなのでしょう。私にはその年の作物の豊凶はどうであつたかは判りませんでした。

#### 足があるご神体

天神さんの西側を流れている谷の西の参道の入口から、五十米程登った所に、雄渕と雌渕という渕があります。現在は両渕ともに石で埋もって浅くなつて居りますが、昔この渕は子供の水泳場として重宝な所でありました。夏は唯一の遊場所でもありました。

水泳の時はこの渕に石を投込み、スプリーに入つて石の取合いをしたのです。沢山ある谷の石では納得せず、ついには天神さんの石のご神体を持出して、これを渕へ投げ込んで取合いをやるしまつてした。時には持ち出したご神体をもとへ戻すのを忘れることもありました。しかし不思議なことにご神体はご自分でお堂へお帰りになる事実を知らされたのです。放つたらかしにして帰つてもいつもチャンとお帰りになつておられて、その時のご神体石はビシヨヌレになつておられたと村人は語り伝えておりました。このご神体の不思議をたたえて、現在でも老人の間では話題になつております。

#### モチコ石と雄渕

明治年代から以前の開発が進んでいない時の学生はノートを使用せずに 石板に石筆で用をたしていた。この石筆の代用にモチコ石を探して使用するため石探しをすることにも興味を持ったものでした。

そのモチコ石がこの雄渕の谷筋が産地でもあつたので多くの子供が楽しんで石探しをやつたものでした。



## 菅原道真公

道真公は仁明天皇の承和十二年乙丑六月廿五日京都の菅原院でお生れにられた。幻名を阿呼または吉祥丸と申され、後人その徳を敬慕して菅公または菅丞相と称えられ、古くから文教の祖神として広く敬仰されて参りました。

公は幼少より文学に秀でられ、御年僅か五才の時庭前の梅花を見て

美しや紅の色なる梅の花

あこが顔にもつけたくぞある

と詠まれました。

また十一才のとき最初の詩

月夜見梅花

を作られ十八才で文章生となり、二十三才で文章得業生に選ばれ、三十三才で文章博士等学識愈々高まり誠直な政見によつて、時の帝の信任篤く次第に高位高官に昇り、遂に五十五才の時右大臣兼右近衛大将に任じられ当代随一の学徳をもつて政務を担当されました。延喜元年正月二十五日（五

十七才の時藤原氏のざん言により太宰権師に左遷せられ九州へ下向される二月紅梅殿の邸を發たれる時、

東風吹かば匂ひおこせよ梅の花

主なしとて春を忘れぞ

と梅花に別れを告げられたことは余りにも有名であります。

不遇の公は延喜三年二月廿五日任地の太宰府で五十九才を一期として薨御されました。

年を経て公の清廉な政治識見学識など偉大な功績が認められ、正歴四年皇室は太政大臣を贈位せられ生前の功績に報われました。

是より後日本全国に道真公を系神として天神社を祀り、信仰極めて盛になり現在では全国の天神社は其数一万二千社に及ぶと伝えています。

## お天神さんの社殿維持管理の模様

何分にも古いお宮であり、永年のあいだに、本仕管理者も年と共に変わっているので記録の保存も行き届いていない為に詳しくはわからなかったが研修で明かになった事項をあげます。



- 本殿の再建は正徳五年八月十日の記事があります。
- 拝殿の再建が寛政元年十月に行われております。
- 文化八年十月には修膳工事が行はれたとあります。
- 天満宮の社名石は本殿再建の正徳の前の宝永七年に建立のものがありません。
- 石燈籠一対拝殿前にあるのは明和六年八月十五日奉納です。
- 参道の石段の施設は上位と下方は新しいのと思いますが、中段は寛政八年に施設せられたと明記されています。
- 大鳥居の建立は明治十四年と明記されています。
- 社務所の新築は大正四年に摂社五柱合祀の際に行われました。
- 神輿庫は永年拝殿の片すみに保管しておりましたが昭和十七、八年に新築して大小二台の神輿を厳重に保管しています。

#### 天神社一千年祭執行のこと

飯尾北門の河野庄平氏方に天神社一千年祭の寄附帳が保存されています。これによって、ふるさと歴史学部の学習の場で色々と話合つて見ますと、明治生れの人々の中に子供で千年祭や何のお

祭やらは覚えぬが最も賑やかなお祭で面白かつた事を思い出すと発表がありました。帳面の世話人名などから推測すると、明治四十年頃の事となり、これから逆算すると一千年前は延喜三年と判りました。

これで飯尾天神社の祭祀道真公は御追位の時が起元でなく、覺御の延喜三年を祭祀起元に完めたと思はれます。



飯尾の天神さん



## 天神社境内に祀る神々の伝説

### 祖霊合祀社の由来

昔は信仰心が厚かったので、堤の上や藪縁<sup>がき</sup>家敷の庭先等に有難いと信ずる諸もろの神を小さな祠でお祭りしておった。信仰心が薄くなったのでもあるまいが、これらの祠を天神社境内に置いて祭りもしないようになった。

この中には祭神として立派な神もある為に放置する事は心にとがめを覚えるので神社総代は協議して特志家の寄附を懇請し、境内大山祇の神と並べて、境内のあすここに置き去りにしてあった祠を集めて祖霊合祀社として昭和四十三年にお堂を新調して祭典を行い祭祀を行うことになったのである。

### 飯尾権現神社の伝説

飯尾敷地小学校の前の県道の南側に権現神社があった。大正四年に天神社へ合祀されるまではここに椋<sup>むら</sup>の大木があり、晩秋の頃にはその実が熟して、ワンプクたちのお貸<sup>か</sup>の供給場所でもあった。

ここで遊んでいた老人は権現さんの思い出を懐しがっている。そして、不思議な伝説を話してくれたのです。

むかし、それは信心深い太平さんという男がおったそう。ある日のこと太平さんは畑仕事の帰り、現在の宮の森へさしかかった。すると、土地がみようにもりあがってくるではありませんか。さてはおぐろ（もぐら）だなと思つて様子をみていると、土の中から妙な音がするではありませんか。太平さんは不思議に思い、鍬をその個所へ入れてみた。すると石粉<sup>いしこ</sup>でできた人形らしきものが現れた。驚いてその物を掘りだすと神様のお姿をしているのです。信心深い太平さんのことだから、これは私が信心をしているのでお神様が私を待っていて下さったのだと大喜びで家にもつて帰った。そして、土でよごれたお姿をきれいにし、表の床で有難い有難いの一天張りでおがんでいたそう。ところが鍬を入れた際、右の肩のところへ当たったのか片手がぶらぶらしており



ました。太平さんは申訳けないことさらに拌み、仕事も手につかなかったそうです。おわびに太平さんは村人にも私の家に土から出た権現さんがきてくれた。どうぞ、皆さんも何の病にかかっても権現さんをお願いすれば治るから一緒に拌みに来て下さいと言ってまわったそうだ。

村人は太平さんの言うことなど耳に入らず、反対に太平さんを拌み屋太平とよぶようになった。ところが隣の子供が頭痛をおこし、医者にかかってもなおらず困っていたので、ものはためしとばかり、太平さんの権現さんをお願いにいった。するとどうでしょう。みるみるうちに子供は元気をとりもどし遊びかけたのです。さあ、この話は村中に広まり、太平さんの家には遠

方からも毎日のように拌み手が集ったといわれます。

それで太平さんは権現さんを掘り出したもとの所へ行き、大きなムクの木を切りたおし、小さな祠を建て、自分から神宮となりお祀りしたと伝えられています。太平さんが祠を建てたのは正長・永享年間とも伝



左腕がくわを入れたあとがある  
権現さんの仏像

えられ、その後信者の手によって再建されたのが明暦二年とあります。その後大正三年の神社合祭の際、天神社へ移されたのですがこの権現さんは人々に忘れかけられていた。

しかし、不思議な話はあるものです。

最近になって、一人の老婆さんが毎夜のように権現さんの夢をみるので、天神社へ行ってみると、物置の隅に放置されたままであった。気の毒なお姿を見たこの老婆さんは総代と相談し、幼き頃、この宮の森で遊んでいたことを思いだし権現様の小祠を建てることに費用を投じたのです。このおばあさんは治田ウメさんのことで、九五才でとても健康です。おかげで長生きができたこと喜ばれています。

このように権現さんは人々に忘れられていても、信心深い人の手によって、私たちの守り神として、今も天神社にまつられ、多くの参拝者があるそうです。私たちは太平さん、おばあさんに改めて感謝いたしたいものです。

市村純逸

山の神さん 昔の私たちの生活のエネルギー源はすべて山の自然林からのめぐみであった。従って人々は緑を非常に大切にしました。冬の農閑期等は子どもまでも、一年中の燃料としてのたき木、



こく葉を集めに山で仕事をしたものです。しかし、山での仕事は思わぬ傷害にあつたりして、根気のいることでもあり、大蛇がでるなどといってそれを嫌つたりもしたのでしよう。

そこで人々は安心して山仕事ができるように、ケガのないようにと祈る気持が強く、それぞれの登り口に山の神さんの小祠をつくり、山へ入る時には必ずその日の安全を祈り、帰りには無事であつたことの感謝の気持をこめてお祈りをしたものです。飯尾の山の神さんもあすここの登り口にありましたが、現在では天神社境内に合社されております。

現在でも山地はミカン所として開墾され、山仕事をされる者は多いのですが、山の神さんを拝む人は少ないようです。時代とともに仕方ないと言えはそれまでですが、自然に対する感謝の気持が忘れられるのは残念でなりません。緑をなくしたことによって、自然破壊から水害が出るようになり、対策は後まわしになりがちです。私たちがもつと自然の中の人間であるということに理解を深める必要があるのではないでしょうか。昔の人々はこうしたことについて、山の神さんとして心の中にも自然と生活を結びつけていたのです。

#### 立志青年隊碑

この碑は明治青年の意気と当時の青年の悲しい物語が秘められております。時代は

明治維新後の激しく移り変る乱世のなかで、日清日露と相続く戦争に、国中はおろか、国民すべて安らかに落ちつく間もなく、子どもにいたるまで戦争のまねごとをしていたものでした。

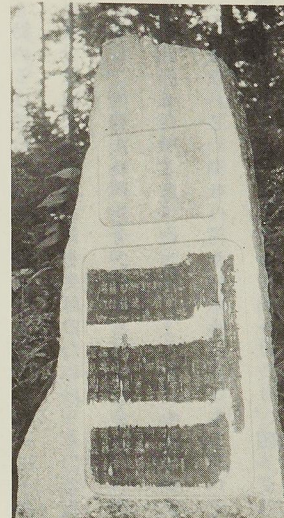
当時の教育は天皇中心の神道からなり、愛国心や義理人情を重じたものでありました。この教育方針は第二次大戦で日本が敗戦することによって、一掃されましたが、現在の教育と比較しても、わが国独自の良い部分もたくさんあつたように思われてなりません。

さて、当時の飯尾村には工藤茂三郎という立派な学者がいて、氏は若き日より、地域のためにつくされておりました。特に青少年の教育には熱心であり、小学校へは自分の山林を寄贈され、奨学を勧めるほどの力の入れようでありました。

夜分には工藤氏の講話を受けるために、二〇名程の青年が集まつておりました。この青年が中心になり、南朝正義同志青少年隊といういかめしいグループが結成されたのであります。

明治三五年頃であつたと思いますが、私を含め同志は国のため、人のためにつくそうと毎夜のごとく道なおしの奉仕に荷車や鍬をもつてちようちんの灯で働きました。また主人を戦地へ送られた留守宅への手伝いにも勧んで出かけたり、困っている人のために手助けになる活動を活発に展開していたものです。





立志青年隊の碑

村人は南朝正義同志青少年隊というちょうちんの灯に浮んだ文字をみて、安心して夜も通れ、道もきれいになったとそれはそれは大へんな評判を受けたものです。青年もまた正義感湧れ、人のためにつくせることで、どんな重労働でも苦しいとは思いませんでした。今でも覚えておりますが、

明治四十三年三月十五日、私を含め同志は工藤先生を囲み、この活動を外地満州にてやりたいと相談し、賛同する者五二名が血印をして、阿波男児の意気を見せてやろうということになったのです。満州に阿波町を建設しようと、計画を企てたのであります。同志を三組みに分け、第一陣は10名で満州の土地調査に当り、第二陣の10名は開発地の決定と準備、第三陣は残りの者で阿波町を建設するという目的で具体的な準備にかかったのであります。私もさっそく神戸領事館へ行き、係官菊地文明氏にこの意を説明し賛同をいただき、戸籍、渡満手続きの申請の方法を教えてください、認可報告を待つことになった。それまで同志は旅費をつくるため大阪・神戸などの都市で働くこと

にし、いざ領事館より連絡がありしだい、天王寺公園に集結する約束をして別れたのであります。

現在では想像もつかぬほど、当時の約束ことは守れる習慣でしたので、誰れ一人としてこの日を忘れることなく、必至の思いで旅費をつくるために働いておりました。

しかし、不幸にして、第一次世界大戦のきざしがあり、領事館からは外地入りを一時中止するようにとの報告を受けたのであります。同志は集り、いままでの苦勞が水の泡となったことに涙したのです。そして、故里に帰る者、軍隊に入る者と別れ別れになってしまいました。時が流れ二つの大戦が二度と私たちの結びつけを不可能にしまったのです。多くの戦死者ができました。

しかし、生き残った者が当時の友情と誓いをいつまでも忘れまいと、昭和四〇年に天神社境内に記念碑を建てたのであります。



## 敷地の氏神さん

### 西宮神社と河辺八幡

新居文恵

敷地には古くから二つの大宮さんがありました。村の西の山に西宮神社、村の中央の南山べりには河辺八幡神社がお祀りされていました。この両社ともに、大木が繁って昼でも暗くて、子供が一人や二人ではこわくて行けないほどありました。それはそれはありがたげなお宮でした。

この両方のお宮には椎の大木が沢山あります。秋の終りになると、椎の実が沢山落ちます。それで子供たちは誘い合って椎の実の拾いあいをして、にぎやかに楽しく遊ぶのでした。ほんとに自然の中で拾い競べを楽しんだ喜びは格



河辺八幡神社址の碑

別で、今でも思い出して、子供にあとがえりしたい気分になります。

この外に小宮さんとして、村の中央に神の木神社、南東の岡の上に山王神社、西北部に雨足神社、西南には梅の宮神社の四ヶ所にお祀りされていました。

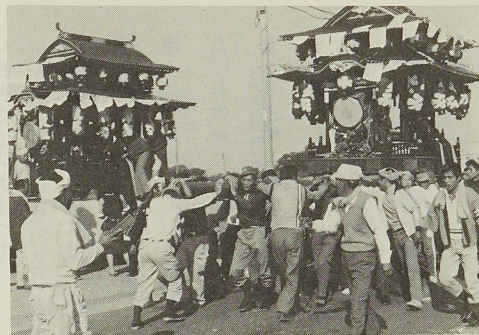
### 氏神さまのおまつり

氏神さまのお祭りは、大宮さんは十月の十四日十五日で、小宮さんは九月の九日十日でした。お祭りにはお神さまがお旅にお出ましになりますのでお神輿が出ます。お神輿にはお大夫さんが附添って、天狗さんが先頭で、お宮さんの額や毛槍、鉾、ご幣、弓、鉄砲などを持ってお供に従いました。お供物には神酒、山の幸、海の幸、野の幸を三方に祭って従って、とても厳重でした。これに屋台が南郷と北郷から二台が出ましてお供につきそれは／＼賑やかに行われました。

小宮さんのお祭りでも子供神輿と屋台二台が出まして賑やかでした。

このように多くあったお宮さんも、新居一平さんが村長の時の明治四十二年九月十九日に、全部の神さまを一ヶ所に合社して、敷島神社としてお祭りすることになり、西ノ宮神社の境内が適当だと決まりました。





おまつりの屋台

そして、ご祭礼は十月廿四日廿五日に変わりましたが、お祭り行事は以前の通り、賑やかで、お旅の時間も三時間もかゝりました。お旅が終りましても、屋台は夜の十二時頃まで村中を担ぎ巡り、トコトン「ゴドッコイ／＼」と、ねりまわり、重い屋台を多勢がさし上げて「サアセー／＼」と差上げるのです。今の言葉でいうクライマックスのありさまで。

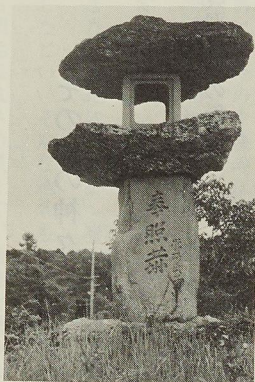
会社して年を経ましたが、大正十年三月に敷島神社の大鳥居が、馬場を東へ下りた唐谷の辺に建立出来ました。この鳥居さんは御影石で立派で大きなものです。他村では見られんど、村人が自まんする見事なものです。

お宮も鳥居も祭行事も立派でありましたが、東亜戦争中は戦勝祈願一本の日参が行われた、けでした。しかし、平和が戻ってからは元の通りにお祭り行事も復活しております。

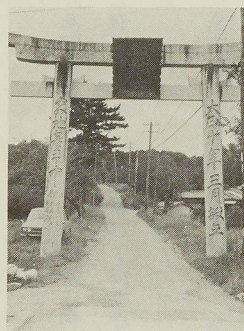
## 敷島神社の伝統

敷島神社の合祀祭にこんなお話を聞きました。

合祀祭の行われた晩に、佐藤喜三郎さん方に風呂を沸かして、家族や隣人などが入浴して縁台に集り、世間話に花を咲かせていると、河辺八幡さんの旧ご殿の方で、大きなシューという音がして新ご殿へ火道が鮮やかにたなびいていたというのです。皆が河辺さんが新ご殿にお移りになつていると話がはずんだということでした。不思議な話でしたが、この有様を見たという人は外にも多数あつたということです。



敷島神社の大とうろう



大鳥居

新居文恵



## その他の神々

### 呉羽神社の伝説

飯尾唐人に古い神社があつた。それがくれは神社とよばれていたことも、この位置にあつたことも誰もが知っておりました。

この神社は飯尾堀二二一の四番地に祀つてあつた。

大正の頃までは基礎石と思われる青石が現地で見られたものです。しかし、現在では農地になつており、その青石さえも探すことができません。ただ昭和になつての記念碑が佗しさの中にポツンとしております。

「続日本記巻五」によれば、元明天皇の和銅五年（七



呉羽神社の碑

一二）の秋七月、阿波国に命じて、綾、錦を織らしたことが記されているので、それ以前に、この地は織物が盛んであつたことが推察できるのです。

当時の豪族たちには大陸文化の影響で、特に衣服が最も憧れの的であつたのでしょう。そして、桑に適したこの土地に、桑を植えさせ、養蚕を行い、絹を織る技術者を大陸から帰化させたのです。こうした織物の上手な人々「くれはとりべ」（呉服部）が当地に住んで、織物をはじめたと、その真実性を伝えております。

これは当地は忌部から麻を植え、絹織物をはじめめるのに条件が適していたことを物語っています。従つて、絹織物だけでも、随分古く約一五〇〇年の歴史的伝統を持つていることがわかります。

呉とは今の中華の江南地方のことで、ここから縫女・工人が飯尾に召され、この源をつくつたものです。呉羽神社はこれらの人たちをまつたものと伝えられ、萬陀羅御前という小祠であつたそうです。

また、敷地には呉谷「唐谷」という溪流があつて、呉、漢服（帰化人）等が麻を晒して織物を生産したといふそんな地名もついたそうです。そしてこの織物を「萬陀羅織」と称して、神代の時代から明治三五年の頃まで、隆盛を極めたと伝えられている。



### 飯尾北門妙見神社

昔、飯尾川西側は広く、竹林でさみしいところであつた。しかし、人々は川の渡りやすいところだけは道をつくつていたのでしょう。そして大きな洲があり馬の洗い場に適したところを馬洲といつたのだと思われます。この高地の馬洲には二、三件の家が建つて居りましたが近くの竹藪の中に小さな森があり、妙見さんを祀つておりました。それでも、地区民はこの小さな祠を中心に年中行事をしたものです。しかし、狸が出る、気味が悪いなどと言われるので、河野嘉平氏、㊦さんが社地を開墾して、安全にしたのです。そして、天神社へ合社されるまで妙見さんも馬洲の氏神となつていた。



### 第三章 ふるさとの寺



ふるさとの寺

### 飯尾高ノ原

### 岡寺（福生寺）の歴史

飯尾の岡の段にあつたので「岡寺」と称されていたが福生寺が名称である。「阿波志」によると、この岡寺は貞和年間には細川氏が香花院として、また天正年間には長曾我部元親が田若干畝を寄進したと伝える古い歴史がある。その後、蜂須賀の入国に伴い、家政が慶長三年（一五九八）地方の動静を監視させる目的で川田に駅路寺として移転させたともいわれている。

いづれにしても、歴史の古い寺で、この寺にあつた青石の板碑は南北朝時代のもものと判断されるもので現在は報恩寺に移転されている。高ノ原では寺跡であると思われる何物も留めておらず、農地になっていますが、人々は昔からこの辺に寺があつたといひ伝えられる場所を示すだけです。

従つて、慶長三年の移転以前より、大衆の信仰の厚かつた事は明らかであります。



## 河 辺 寺

### 河辺寺跡のこと

敷地に河辺寺という寺があつて、大へんな権力をもっていたと古くからいい伝えられていた。しかし、最近にいたるまで、その事実を立証する物的証拠がなかったものであります。ところが昭和二十九年、敷地の佐藤一氏が畑仕事のため、宮の北の自分の畑に鍛をいれたところ、礎石らしい石があることを発見したので、昭和三〇年、これを発掘調査した。

すると一七筒の礎石がきまつた間隔にあり、その配置、並びに出土した瓦などにより、河辺寺跡であることが確認できたのです。そして、時代考証の結果、およそ、平安中期に創建されたものであろうといわれます。

この河辺寺と称する起りは、吉野川がこの地を流れていたのではなく、敷地谷川の辺りにあつた

からこうよばれていたと解するのが正しいとされます。

また、寺跡から発見された瓦は平安時代前期の弘仁、貞観のものもあり、鎗瓦といつて、焼き方も堅くち密で、青ねずみ色を帯び、歴史的にも考古学的にも、遺跡とともに貴重なものだそうです。それは、当時これだけの寺を建立する豪族がこの地に住んでいたことが証明されるからです。町教育委員会ではこの地を購入し、寺跡も県文化財指定となつて、いつまでも保存されるようになりました。

また、この研究中新居文恵さんが提供してくれた古地図からも、この河辺寺の広さから相当な権力があつたものと思われれます。

鴨島町誌参考



河 辺 寺 跡



## 敷地の河辺庵

河辺庵はもとの河辺寺境内地の一隅六畝の地に、建坪は三メートルに二メートルのささやかなものである。ご本尊には石像の合掌地藏さんが祀られております。

庵主の小山氏は先年、東京から四玉の地藏さんの調査研究に見えられた先生にこの合掌の地藏さんは四国中で只一つであり、非常に珍しいと申されたと話してしました。

この庵の西南北にかけての一带は古い歴史を持つ河辺八幡宮と河辺寺境内であつたと伝えられています。河辺八幡宮、河辺寺建立の歴史は古いとの言い伝えでありますが年代は残念ながら詳しくありません。

河辺寺は天正年間、長曾我部の兵火にあい、焼失したとの説もあり、またそれ以前に焼失していたとの説もあるのでいろ／＼調べるうちに岡田茂一氏の書に

紀伊の国、三里の二階堂家保存の古書に、康正二年九月二十八日付で、この地藏尊は河辺寺の遺物なりとの証明があります。そして岡田民部丞源連茂、孫次郎忠正、先達明泉坊五真の連書で認められておるとの記載されていますから、康正二年（五一七年）以前に既に焼失していたのが事実に近い

いと思われれます。

河辺寺焼失の後、永年を過ぎても再建が出来ないまゝでありましたところ、たまたま敷地の在所に、厄病が流行したり、不幸な家庭が続出したり、とかく不幸が多いので村人はこれは河辺寺の佛さまの障りではあるまいかと評判が立ち、何とか寺の再興をと度々協議をしました。

でも何分多額の建設費を要するので着手に至らず、年を経えておりました。遂に明治三十年に寺が建立できなければ、せめてお庵を建て佛さまをお祀りしようと、河辺寺跡へ村人の協力で、現在の河辺庵が完成、本尊さまには、さきに述べた合掌地藏さんをお祀りしたものであります。

その後村人が信仰している／＼の利益をうけました。特に妊婦が安産の願をすると、安々と元氣な子どもが生まれるというのです。このことは聞き伝えて、他村からの参詣者も多くなつたと伝えられています。

また、このお地藏さんは火伏せのお地藏さんとも伝えられております。不思議なのは、村に火災が起こると、庵の近くのはん鐘が最も早く鳴って、火災を伝えたと話に残っております。現在でも火災がある時は庵主にお告げがあると言われているのは地藏さんのご利生だと信じられており、敷地には火難が少く、出火があつても類火は全くないと村人は信じています。



とにかく東京の先生が調査の結果、四国中に一体しか無いと言われたとすれば、この合掌の地藏さんは珍しいお姿であり、また二階堂家の古文書による年代を思うと大切にいつ迄もお祀りをしたいものです。

## 宝幢山持福寺

### 持福寺の古美術

深見 定一

この寺の縁起は古い。そして、歴史宝物も数多く保存され寺の格式を物語っている。

持福寺は真言宗本山仁和寺に属して、檀家も五百戸を越え、名西郡阿川、麻植郡川島、飯尾地域を始め、鴨島、知恵島、森藤、山路、内原、中島、敷地、西麻植など広範囲に及んで信徒が多い。

ご本尊の阿弥陀如来座像は平安末期か鎌倉時代初期の作品と言われています。

このほかに、鴨島城主、鴨島六之進寄進による室町時代の作、佛涅槃図画一幅、朝鮮李朝時代の作、釈迦八大菩薩像一幅、朝鮮李朝時代の作、地藏十王図一幅等、徳島県文化財指定作品が保存されています。



真言宗金胎両佛式必具の金蔵界五瓶五個と、胎蔵界五瓶五個の十口が保存され、現在全国でこの種の五瓶十口が完全保存せられているのは極めて珍しいとの事です。昭和四三年六月二〇日徳島県教育委員会承認の上で奈良国立博物館に古美術工芸品研究の為貸出し、同館に保管展示せられていることです。

この五瓶は室町時代の鑄銅製作品で貴重な工芸参与のものであると鑑定されている。従って持福寺では奈良国立博物館からの預証書を保管している。

渡唐天神像一幅、天正年間土藤光興の筆と伝えられています。

また、江戸時代になってからの作品には本尊阿弥陀如来の脇侍の不動明王立像一本造りで彩色されている一体は毘沙門天立像前像と同様作風である。

十一面観音像一体は寄木造り静穏な表情のお姿である。

弘法大師像 一木作り

この佛像の眷板に黒書の銘文が左の通り

奉新造立高祖大師の尊像一軀

右之意趣者為心月寿光信女茅廿五周忌

景増進仏果菩提也 内原村石田孫之丞室

于時元録九丙子曆五月下旬

当村 岡田弥次兵衛

全 宅兵衛尉

全 弥三郎

腹部裏面には、

本願持福寺権大僧都法印快実

大仏師淡州住源右衛門尉義索 とあります。

この外江戸時代の絵画幅には

胎蔵界曼荼羅図一幅 鮮麗な作品

金蔵界曼荼羅図一幅

釈迦十六善神画一幅

大般若経六百卷 江戸時代の品

以上の外に書きもらしたものがあと思いますが、持福寺ではこ





れら数多い文化財の保存の実態を檀家の皆さんにご覧に入る為に徳島県教育会の田中善隆、佐藤文彦両先生の調査編纂の「持福寺の古美術」写真と現品の説明を加えた詳細な写真帳を檀家各戸に呈しているのを見ては総てを知ることが出来ます。

持福寺は当初からこの地に存したわけではなく寺の縁起の示すところによれば、元名西郡神山町阿川上河内に、弘仁年間弘法大師焼山寺の開創に当り共に建立された山岳寺院で両寺ともに寺運すこぶる繁栄をみたといわれております。

しかし、弘仁年間から約七百余年余を経た天正年間に、不幸にして火災のために堂宇を焼失したので時の住職晴雲僧正は再興に金精魂を傾け、檀徒全般の経済力や将来の見透しなどを考慮すると共に、飯尾の正寺（福生寺）が蜂須賀藩により慶長三年川田村に駅路寺として移転せられた跡この真言宗寺院の状態なども慎重に考えて、慶長年間の末頃に至り、現地に本尊阿弥陀如来を奉じ、寺名持福寺と共に移転建立を完成させた。晴雲僧正の苦心巧積は偉大と言うほかは無いと、代々住職は持福寺中興の祖として尊敬を捧げて来たと伝えられる。

現住職の尊雄権大僧正で中興の晴雲僧正から二十代を数えると言います。

持福寺は晴雲僧正後も人材に恵まれ、特に十四代住職竜淵僧正は官令に依り、著蔵寺住職に転じ

権僧正の位を得られたと伝えられています。この事實は当時の持福寺住職の墓前に著蔵寺から贈られた燈籠が現存していることによって証明されております。

蜂須賀藩では本寺を信任せられたのでしよう。飯尾村棟付帳に持福寺食禄十八石六斗七升五合と記録されています。

世間から忘れられておりますが明治維新前の神佛合祀の時代は持福寺の代々住職が飯尾天神社の別当として祭祀を本仕しておられた。また、飯尾天神社と森藤八幡神社は鴨島地域の氏神であるが夏秋の大祭の時期に出水の為に通行が出来ない場合があるので両社の分神を鴨島に八幡神社として祭祀した。この神社の別当職も持福寺住職が掌っていたのでした。

当時は仏教道場と信仰のより所ばかりでなく地方文化の開拓の一拠点でもあったのであらうと思われます。

### 持福寺の伝説

伝説や飯尾敷地小学校百年誌などを参考に綴て見ますと、天保の頃、徳島大岡の住人で蜂須賀藩士であった林勝三郎「居陵」と言う人が一族の罪に連唐して持福寺に身がら預けとなり、謹慎生活



を送って居られた。この人は幕府の濡官古賀精呈先生について学を修めた学者で有名であった。県内各地から先生の学位を慕い教授を求め集まったので寺の方丈が塾として使われ、地域の文化教養面に貢献した。文久年間に没したので徳島で浪人しておられた滝辰三郎先生を教師に依転して塾の跡を続けたが、居陵先生同様には栄えなかったということです。

その後明治となり学制発布の前明治四年にこの寺が麻植郡本郷学校となり、生徒は教育者の養成が主目的であつたようである。今の高等学校に相当したのでしょう。しかしこの郷学校はその後川島へ移されました。

このように持福寺の寺運は盛んであります。上河田（神山町）の寺跡は今になお持福寺跡とか寺屋敷とかこの辺がお花畑であつたと言われております。村人は寺跡に小さいながら堂を建て本尊



1600万辺塔

の阿弥陀如来像を新作して祀り信仰の場とし、在所の集会場として昔の寺の歴史を偲ばれておられるように思われました。

寺跡に現存する古い板碑が多数あり、石の多宝塔も由緒ある歴史を物語っております。神山町教育委員会は多宝塔と板碑を町の文化財に指定されていると承りました。



阿弥陀如来



## 四国霊場

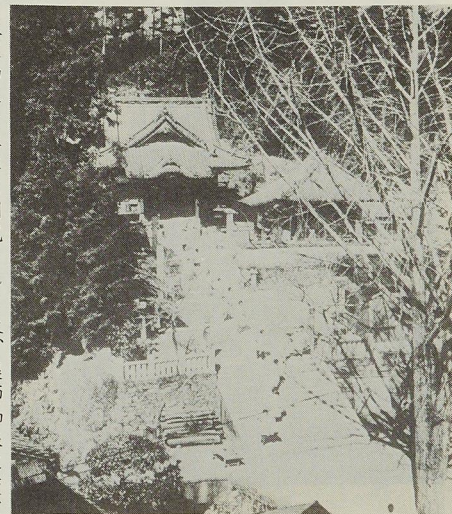
### 第十一番の藤井寺

藤井寺は鴨島町では観光地として昔から有名で参詣者も年間絶えることは無いと言っても過言でありますまい。

この寺の由緒については近隣の人々ともに調べて見ると、弘法大師の創建なので弘仁から起算しても千百五十余年になる。

正確とは申し難いが、弘法大師が真言宗として釈迦如来を本尊に創祀されて後、薬師如来に変じ、宗旨も禅宗になったといわれています。

この寺はもとは現在の境内の東側を流れる藤井谷の本の山腹西科面に、七堂伽藍を設備した立派な寺であつた。天正の長曾我部の戦火で焼失せられ、年を経て、今から二百二十余年前の寛延年間



藤井寺

漸く再建せられたが、其後天保三年再び火災により焼失した。幸いにご本尊は無事で現在の仁王門辺りに避難されているのを発見してこの周辺の地がご本尊のお望みならんと現地に復興の工を起して完成、現在に及んでいる。

またかのように伝える人もある。天保火災の節、ご本尊を見付けたのは時の報恩寺住職であり、藤井寺の本堂竣工迄は報恩寺に滞在せられたと話されました。

とにかく千百余年の永い年月の間とは言え四回の当宇建設を完成したことは大衆の信仰の力による所で恐れ入る次第です。

婦人会を中心にした鴨島町ふるさと探究学習会がまとめられた藤井寺の探究についてはこんなようにまとめている（昭和四十九年二月）

寺の創建時代については、なか／＼難しいのでありますが、寺に残された本尊の製作年代、久安四年（一一四八）以前の、平安中期か末期頃に建てられたのではないかと想像されるわけがあります。本尊薬師如来は



仁王門



国指定重要文化財で、久安四年に仏師経尋によって作られています。この経尋という人は備中の国、現在の岡山県の人で雲辺寺の本尊である千手観音像を製作した人と同一人であると言われています。もと／＼このご本尊は釈迦如来であつたのが、いつかの時代に薬師如来に改宗されているのであります。

というのは藤井寺はもとは真言宗であつたのが途中で禅宗に変わっています。おそらく室町時代に改宗されたのではないかと思われます。なお明治四四年八月九日に国の指定を受けていますが、このときも釈迦如来として指定されています。このご本尊は天正の兵火のときは谷にころがり落ちて難をのがれ、天保の火災のときは近くの報恩寺の住職によって避難しています。このように幾度かの厄難にあいながらも無事なご本尊をやがては厄除の薬師様として信仰するようになり、いろいろの伝説を今なお残しています。

またこの寺は巡霊場にふさわしいいろいろな伝説や遺跡が残されています。本堂から二〇〇メートル程登った所に八畳の岩があり弘法大師が寺を開基せられたとき、護摩修業をせられた跡として弁財天が祀られています。谷川の水が美しく流が急で、その音がはげしく大師の修業の場を偲はれるところであります。



藤井寺周辺の碑

ここから山道を徒歩で、焼山寺まで、八ないし九時間かかります。歩く遍路にとつて最初の難所であり、昔は寺の近くの遍路宿に泊り、朝早く出発しても焼山寺へ着くのは夕暮れ近くになつたといわれ、女遍路が殺されたこともあるので、女一人の場合は危険であるから同行遍路を見つけて同行するのがよいと土地の古老は言っています。

焼山寺までには途中長戸庵、柳の水、一本杉など大師が休息あるいは修業したといわれる所があります。この山道を登り降りすること十六キロ、苦行を体得するには貴重な遍路道であります。近年は自動車で徳島市から焼山寺へ登る巡礼が多くなりましたが、昔は藤井寺から焼山寺までは遍路泣かせの道であつたのです。

江戸時代のはじめ、四国の霊場を遍歴した、高野山の僧の寂本はその著書「四国巡礼霊場記」の一節に「此寺大師啓迪なり、本尊薬師如来、大師作、寺前鐘、楼傍に地藏堂、鎮守祠あり、下に仁王を構へたり。今は禅者棲息せり。二水によって延溪として、岩間に段々落る所、白藤の棚など見



えきとぞ、堂前古藤あり寺の名は問はでも知りぬべし。」とありこの当時藤井寺と言っていた事は確かであります。

昔ながらこの寺は月光明眉さながら絵一幅のふぜいの中にあるのであります。

なお寺は、昔から伝えられている南山和尚像があります。この肖像画は元禄四年の秋に画かれたものであり、禅宗において其始祖や高僧を画いた肖像画を頂相とよばれています。普通は上半身の像を画いたものでありますが、後になって立像や全身像を画くようになり、頂相様式として学者のなかでは一括して取り扱われています。

この像は徳島市福島本町の慈光寺の住職で、江戸の初期に本山妙心寺の管長となったことのあるほど活躍した禅僧南山祖団和尚を画いたものであります。この人が藤井寺の住職をも兼ていたのであります。

絵の画き方は顔形を表現しようとしているが、衣の模様、袈裟などがこまかく描写されて、元禄時代を偲ぶのにふさわしい資料であります。この和尚は七三才でなくなっていますが、画の上段に自分で書いたという漢文体の賛文があります。また寺には一休和尚が書いたという書が残っています。

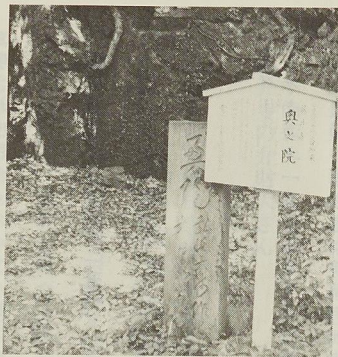
そこで私達学習グループは藤井寺について次のような結論を得ることができました。

一、藤井寺の創建時代はいろいろ説もあるが資料が残されていないので、はっきりしていない。本尊薬師如来の製作年代から推測して久安四年以前の平安中期頃ではあるまいか。

二、藤井寺は平安時代鎌倉時代室町時代を通じて四国の巡礼の霊場として栄えてきたことは確かである。

三、おそらく室町の末期頃、真言宗から禅宗に改宗したのである。その後、まもなく本尊釈迦如来を薬師如来に変えているのである。江戸の初期に高野山の僧、寂本がこの地を訪れた時は既に禅宗に変っていたことが彼の著書「四国巡礼霊場記」の中に書かれている。またその後、元禄年間も禅宗の寺として栄えていたことが南山和尚像からもうかべる。

このように一方では四国八十八ヶ所の霊場として、また他方は禅宗の寺院としてきびしい時代の変遷の中で、一人二足のわらじをはいても、法燈をたやすことなく守り続けてきた歴代の住職





に對して、私たちは心から感謝の意を捧げたい。と同時に、これからも藤井寺さんお薬師さんと、尊敬され庶民の心の中で永劫に生き続けることをみ仏にお祈りするのであります。

#### 藤井寺本堂大師堂仁王門

#### 復興由來之記

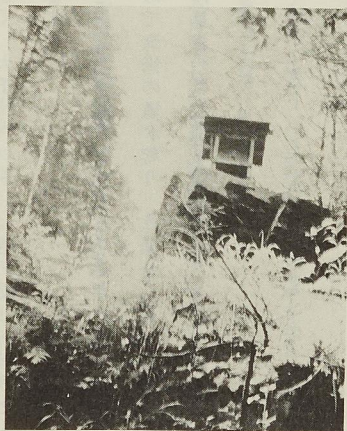
發起人特志家名録

大日本南海之一島徳島県阿波国麻植郡西尾村大字飯尾村金剛山藤井禪寺者四国八十八ヶ處之一ニシテ弘法大師之垂跡也本尊薬師如来端嚴微妙之相ハ大師四十二歳厄除之爲一刀三札之彫刻也云云茲ニ天正之頃長曾我部之兵火ニ罹リ伽藍殘ラス焼失シ其後仮リニ小キ堂宇ヲ建立シ本尊の安置シタルモ其名跡ヲ残ス而已ナリモヲ將又天保三壬辰年之秋回祿ノ災ニ堂宇悉皆灰塵トナリテ星霜ヲ経過スル支既ニ三十餘歳時ニ予文久三癸亥年佛恩報謝爲此破院ニ住シタレ御從來無檀十方施主ナレハ糊口ノ資ナク日々悲嘆スルノ外ナカラシヲ當村乾覚郎、工藤友吉、敷地村須見徳平、住友与平、住友傳十郎、外西三輩ノ有志諸君其情ヲ推測シ救助ノ方法ヲナシ並ニ本堂再建ノ發起者トナリ清財ヲ擲チ東

寺西馳信徒ヲ説誘引シタル功顯著ルシク明治四年辛未三月佛殿一宇成就ス依テ全月廿日上棟ノ式ヲ举行シ翌廿一日入佛ス次ヲ廿年ニ至リ當村河野弥平、松井与三郎、工藤周弥太、河野政七、古谷善吉、岡田貞蔵、大村永蔵、古谷藤七、近藤庄蔵、石原友三郎其外数輩ノ諸君同心戮力之功ヲ以テ大師堂始ヲ石壇玉垣等ニ至ル迄悉皆落成ス尚亦廿三年仁王門新築に取係リ全廿五年四月八日入佛セリ予住職在勤三十年間ニ新築ノ諸堂七棟殆往古回復スルヲ得タリ故ニ這回、工藤周弥太君其功勲ヲ後世ニ遺知センカ爲碑文の乞テ止マス因テ蕪言ヲ綴リ次テ其志ニ充ル事然リ

#### 藤井寺の弁財天さん

藤井寺の本堂前を南へ鳥居をくぐつて五百米ほど行くと弘法大師が当時をご開創の際に十七日間の護摩修行を嚴修せられたと言われる八畳岩と称する大きな岩が立つており、藤井谷川の上流が岩に添うて東側を流れておりこの流れに弁天の滝という滝がありこの岩を下方から見ていると今にも滝壺に落下して来るような



八景岩と弁財天あと



感じがすると言われこの岩は藤井寺の名所でもありまして、大正時代以前には春の遊山の場所として多くの来詣者のお弁当の場所でにぎわった所でありました。

八畳岩の上には弘法大師が創祀せられたと伝えられたお堂に弁財天が祀られて永年に亘り信仰者の来詣がありました。大正年間にお堂が老朽化したので改修の儀が起り、改築せられてお堂の入口に石焼籠一対が奉納せられ、通路は悪いが附近一帯に尊嚴の氣が漲る霊地でありまして今に八畳岩の弁天様と其名も高く来詣者跡をたちません。

#### 藤井寺周辺のお詣り所

藤井寺の周辺には数々のお詣り所があつて一巡りするには半日はかかりました。

現代はスピード通路が殆んどでこれらのお詣り所を拝んで歩く人は少数になりましたが、まず本堂から南へ十二番札所の焼山寺への参道を二〇〇米程行くと谷縁へ出ます。今でも深々とした氣が漲り谷水のせ、ラギと小鳥の声も聞けます。この辺で大師が修行となされた跡で大師は大日如来を奉祀せられて藤井寺の奥の院として残されましたので昔から信仰の場として参詣者が杖を運んだのでありますが、現在はここまで足を運ぶ人はきわめて少数です。

然しこの道筋には四国八十八ヶ所のお参りの札所が信仰者の寄附により祀られ、併行して西国三十三所の観音さまの札所も祀られています。奥の院の南側には虚空蔵菩薩の石像が安置せられ詠歌の歌詞が板碑高さ一、三〇m、巾〇、六〇mに虚空蔵菩薩の詠歌

ねがいなばいつれもかなふほどけの

ちかいはちゑののりのわのてら

ちゑふくや六つと七つのまいるこに

さすけてのりをてらすみほどけ

この外に数枚の歌碑が立てられており、休み台も置かれてあり、これだけの施設をせられた人の奉仕の心を汲むだけでも清らかな心になりありがたい氣分が沸いてきます。

残念ですが奥の院の小さな堂は老朽して取り除かれ今は大日如来の像が岩を切込んでそこに祀られておるばかりでお詣りして淋しい感じでした。

ここから東へ細道の所々に八十八ヶ所霊場と三十三ヶ所霊場が続いております。

八畳岩の弁天さまの事は次に項を改めます。



### 藤井寺周辺の遍路宿

四国霊場八十八ヶ所の第一番札所、霊山寺から第十番切幡寺を参詣すると、南進して吉野川を渡し舟で渡って、十キロを歩んで、第十一番の藤井寺に着きます。この寺の参詣を終ると、四国霊場道中難所である十二番に至る急坂の多い十八キロに及ぶ山路にかかります。

この間に約四キロ弱の所に長戸庵があり、又四キロで柳水庵があります。この柳水庵は弘法大師が天長九年三月、御巡錫の折休息されて、用水の無い不便を思召され柳の枝を採って加持されると、清水が湧出したので後世の参拝者の為に、一字を建立せられたと伝えられています。

また四キロ進み左右内の峠に一宿山一本杉庵があります。大師深山で日を暮し疲労して、木の根に一睡され、霊夢により、阿弥陀如来を刻まれ堂宇を建て、安置されたそうです。衆生に信根培養の思召で手植された杉は今なお若杉のような樹勢で空をつき、県内最古の杉として繁茂しております。

このように心ひかれる道中ですが、男子でも五時間程、女子なれば八時間を要するのでお遍路さんは大事をとって、殆んどが藤井寺附近の宿に一泊して、翌早朝に出発するのです。従ってこ

の六七軒の宿屋が無くてはならぬ役目を果たしていました。お遍路の出盛る早春から初夏にかけては、多い遍路客で多忙を極め従って繁昌していました。

昔の遍路は長旅なので身廻りの荷物が多いので山にかかるには宿に荷物を頼んで国府の十六番観音寺の宿送送ってから身軽で登山にかかるのでした。

このようにお遍路さんの為に便利であった藤井寺周辺の宿屋さんも、現在のように沢山の遍路も、バスや自家用車で参拝するので利用者は少くなりました。今でもお遍路は宿りますが昔の繁昌は夢になりました。



## 報 恩 寺

### 報恩寺の伝説

鴨島駅から南方に望むと、山のでまゑに大きないちようが見えてくる。その下に阿波西国二十九番札所、速成山、覚性院、報恩寺、別名いちよう寺がある。

報恩寺はもと四国霊場十一番の札所、藤井寺から十二番の焼山寺へ越える標高三百メートルの槇山地にあったと伝えられている。弘仁年間、弘法大師が四国御巡拝の時に、この山中で迷子を救い、その子のために愛情の守護仏「愛染明王」を刻んで村人に託した。その子は村人の愛情のもと立派に成長し、大師や人々の恩に報いるため僧侶となり、報恩の一字を寺に建立したので、いつのまにか報恩寺と呼ばれるようになったという。槇山地にあったところは「火山寺」とよばれていたそうで、現在でも寺跡、寺屋敷跡と呼ばれている地があります。鎌倉時代に現在の飯尾七二八番地に移転し

たものです。

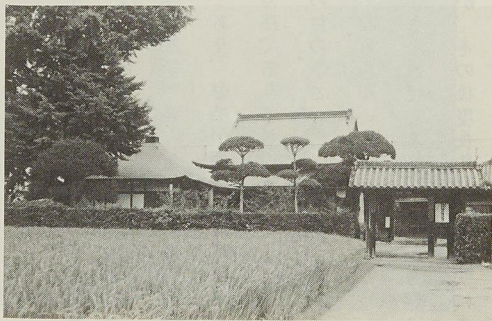
### 報恩寺と飯尾氏

報恩寺は中世阿波の豪族であった飯尾氏の菩提寺であった。飯尾氏は承久の変の功により、平康頼の子清基（玉林寺）に代って麻植荘の地頭に任ぜられ、代々彦六左衛と名乗り数々の武訓をたてた。なかでも室町時代八代將軍足利義政の筆頭書使を勤めた飯尾常房は書道、歌道にもすぐれた。応仁の乱で焼野が原となった京都の街を嘆いて歌った詩は昔の教科書に載ったほど有名です。

なれや知る 都は野辺の タひばり

あがるを見ても 落つる涙は

この寺の大いちょうの下に飯尾氏を偲ぶ五輪の墓がある。付近の人々はこの墓を「夜泣きの神様」と言って信仰し、幼児が夜泣きすると、この墓に願をかけたら、たちどころになおったといわれた。またヒステリーの妻に悩む夫や大酒飲みの夫に苦しむ妻が願いをかけると靈驗あらたかだと信じて



報 恩 寺



いる。これらも飯尾氏への信仰が厚かったからでありましょう。(飯尾氏はふるさとの人物誌をご覧下さい。)

### 藍作と愛染明王

蜂須賀家政が阿波に入国してまもなく、前仕地の播磨から「アイ」の種を取り寄せて、この付近で試作してみた。この結果、土壌に適しよくできたのでまたたく間に領内で栽培するようになり、藩の指政を支えるきっかけをつくった。寺の付近には白壁の藍寢床が並び、盛んであつた藍作時代の面影が残っている。寺の本尊である「愛染明王」がアイと同音であり、愛染が藍染めに通ずるところから、藍作の関係者から特に信仰されるようになったことは当然でありましょう。

また報恩寺の観音堂の聖観世音菩薩は御詠歌、おもうこと、いのおのさとの

おもうこと、いのおのさとの かんせ音 ねがいもはやく、なるちかいかな。

と、唱われているとおり、阿波西国二十九番の観音さんとお観音さんと親しまれ、人々から厚い信仰が続けられている。報恩寺は天正年間に火災で堂宇焼失したが、その後慶長年間に僧憲明によつて再興されたと伝えられている。また境内裏庭には元享元年の板碑がありますが保存状態もよく

歴代のご住職の手のゆきとどいた管理に頭が下がります。

### 報恩寺の板碑

報恩寺の裏にある三基の板碑は本町板碑の代表的なものである。板碑とは鎌倉、室町時代から、死者の追福供養のため立てた供養塔のことで、石の辛塔姿である。

これらの板碑は保存状態もよく、その中の一つは、正和五年(一三一六)六月十八日の銘があり、他の元享元年(一三二一)六月十九日、応永四年(一三九七)十月三日のものとともに麻植郡内で発見されているもので最も古い。眼ではつきり読みとることができ、たて九九センチ、幅五〇・五センチの緑泥片岩にキークク サ サクの阿弥陀三尊の種子が刻み込



板 碑



まれている。

作者由来は不明であるが、おそらくどこからか移動されてきたものと想像される。何故なら、報恩寺は古い寺であるが、中枝村樋山地から当地に移されたともいわれる説があるうえに、この板碑は高ノ原岡寺より移転されたものであると石原六郎氏が麻植郡誌に明記されています。

## 地藏さん

### 唐谷の地藏さん

ずっと昔、この辺は一面の川原であつた。川の流れも今とちがつて、敷地の南部地区の北の端を流れ、橋も薩摩家屋敷（馬淵さんあたり）の所にかかつていたという。

時代とともに水路が開かれ、土手が築かれ、だんだん荒地が田畑になり、在所が西と東に分けられたということである。

川の東に古い家柄の大きな庄屋があつた。川の西にも先祖が伊予の国からきたという大きな庄屋があつた。東も西も、それぞれの在所で大きな勢力をもつていて、互に自分の家柄や財産を誇り、相手方を「あの程度の者が」と鼻先で笑うようなことであつたという。

西方の庄屋にそれぞれ年頃の似た息子があつたがある時、列々に南の山に狩に行ったことがあつ



た。この二人が東と西から同時に一羽の鳩にねらいをつけた。どちらの矢がかすめたか分らんが鳩が下へ落ちた。「この鳩はわしが射たものじゃ」「いや違うわしのものじゃ」と言い争いになって、これが騒ぎの元になる。

西の庄屋が、恐れながら……」と役所に訴えたが、鳩のことではない。「お留場の木を切った者があ  
る。」と訴えた。当時、唐谷川上流の山は、国の守の許しがなくては、どんな小さな木でも切っては  
ならぬという決りがあつたという。

驚いた役人が訴えた西の庄屋を連れて現場へ行くと、なるほど木が三本切られていた。「何者か」  
と問うと、東の庄屋の息子が切つて家へ運んだという。  
さつそく調べると屋敷の裏に隠してあつたのが発見さ  
れて、切り口もピッタリ。

上を恐れざる行いであると、東の庄屋は家族すべて  
捕えられて厳重な取調べを受けた。もとより身に覚え  
のないことで、誰かがおとし入れるために仕組んだ罠  
であると必死になって申し開きをしたが、役人は現実



唐谷川の地藏

に木が切られているのだから、どうしても犯人が必要である。どうとう庄屋の一家は五人とも川原  
に引き出され、首を切られてしまった。

ただ一人、三歳ぐらいの男の子がいて、これは乳母が抱いてしばらくは逃げまわっていたが、な  
んといつても国の守の威光は強く張りめぐらされた網から出ることができず、疲れはてて唐谷川の  
橋の下でうずくまっていたが子どもが泣き声をあげたので発見され召し捕えられてしまった。そし  
て国の守の所へ使いを出した。

当時家族すべて死刑というときでも、一人だけは残すということがあつたので、一人残った男の  
子を助けてよろしゅうございますかと念を押してきたのべある。

ちようどその時暮の好きな国の守はとるのとられるの、切るの切られるのと、勝負に夢中で、取  
りついだ者への返答もうわの空。「ええいーめんどうだ切つてしまえー」とどなるような大きな声。  
「ハッ」とあわてた取つぎの者が「急げ、すぐ切るのじゃー」と、使いの者へ言ってしまった。

しばらくして、暮が終りお茶を一杯の国の守。「切ると言うたのは石のことじゃ子どもは助けてや  
れ、早くー」と、あわてた。驚いた家来が早馬をとばしたが、時すでにおそく、すべては後の祭り。  
殺さずともよかつたものをとあわれに思つた在所の人が、かわいそうな男の子のために地藏を建て



たという。

この地藏さんがあらたかで、夜泣きをなおしてくれると言い伝えられ遠くの村からお参りにくるようになった。また妊婦が十四日や二十四日にお参りにきて安産を祈っているということがある。このようなご利益を受けた人によって今にお供物や新しいよだれかけを取替えたり地藏さんへの感謝と慕情がよせられ唐谷のお地藏さんと親しまれ信仰されています。

#### 敷地唐谷南の地藏さん

敷地の氏神さん敷島神社の大鳥居の東側を流れる唐谷川に添うて、南へ約一丁程行くと、道の西側に、谷ぶちに高さ（台石とも）約一間程のお地藏さんが北向きに祀られています。彫んである文字を見ますと、地藏さんの建立は明治十一年寅の年とあり、石工は板野郡撫養高島の住人亀五郎、建立の世話人は在所の新居秀造、宮西文四郎、松本喜五郎、関本市太、新居友造、松本貞造、新居藤三郎の七人の人々であります。

近所の新居機次郎さんの話によると、お祀りしたのは明治十一年の寅年の大水でこの辺は唐谷の堤防が流され、田畑や住宅に大きな被害を受けた。そこで在所の人々は二度とこんな災害をうけ

けないように堤防を修復すると共に、お地藏さんを新たに祀りして安全を祈願しようと協議がまとまった。そしてこの地藏さんを建立したのであると話されました。

また新居さんはこんな事も話してくれました。

科学万能の時代にこんな迷信と言われるでしょうが、この地藏さんが東向きで有た昭和十年頃と思いますが、私宅に病人がありまして長期に渡って療養を続けていました。しかし少しも快方に向かず、ことに病人の態度に時折首をかしげるような状態の事もありますので親戚や友人にも意見を求めたりしておりました。そこで徳島の津田に不動さんを信仰している女の祈禱師があり、拝んで貰えばよく判るとの話なのでさつそく苦しい時の神だのみとばかり、津田まで出かけて祈禱を頼みますと、「お前さん宅の近くに東向に祀られておる拝み所があるだろう。病気の障りはそこからお告げがあるが思い当る所は無いか」との間に色々考えてみて「お地藏さんの外にそれらしい所が無い」と答えると「その地藏の向きを変えて見なさい」との教えなので早速帰って地藏さんの向きを南に向いて頂きました。すると病人はいつとはなく快方に向かいました。この事ばかりであれば、偶然の出来ごとぐらいに思われて終るだろうが不思議にも、それから数年して、お地藏さんの向いた南に当る林さんの宅に病人が出来て経過は私宅の病人と同様なので、参考までに



と思つて先のようなことを話すと、それでは私宅も祈禱を頼んで見ると、津田へ出かけたのでありました。祈禱の結果は南へ向いて何かあるだろうとの事で私の宅の事もあるので、隣人にも話をし、南向きに変えたのを北向きに変更して祀り、この時は飯尾持福寺の住職を迎えて法要を厳重に行つたということです。すると病人も追々快方に向いまして全快致しました。

この地藏さん村人の信仰に答えられて百年の間雨の日も風の日も村の安全を守つておられるのでしよう。

今でも信仰の厚いお参りの人が供えたお賽銭が七ハケ祭られておりました。

### 飯尾ひょうたん谷の地藏さん

この地藏さんは、飯尾の県道浦庄西麻治線のひょうたん谷西の南側に祀られていましたが社会の発展につれ道路も度々拡張工事が行われたために元の場所にお祀りできなくなり現在は南方山麓の藤井寺参道の南側に移転して祀られています。

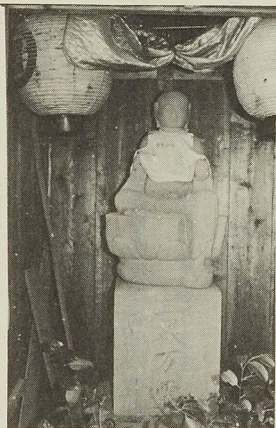
ひょうたん谷の地藏さんを祀つたのは今から約二百十六年前の明和元年霜月初四日と明記せられております。

昔の当地の状態は谷が自然のまゝで谷中が広くて荷物運搬の為に舟の出入がせられていたのですが、ある年の大きな台風による大水に舟が転覆して数人の命を失つた惨事があつたので土地の人々が此不幸な人の冥福を祈り後この不幸が起らないようにとお地藏さんを祀つたと古老は伝えていいます。

地藏堂の周囲には石碑や板碑も昔は有たこの話で、土地の世話人は正月と七月の地藏さんの祭日には町堂に供物をして寺の住職に転んで経を上げ安全を祈願して参詣人も多く、ひょうたん谷のお地藏さんはご利益が「あらたか」など近郊からの参詣人も多くなり当日は子供のお参りも多く店を出すようになり道の通行が止る程の賑やかなお祭りが行われていたと伝えて居ります。

古老は周囲に有た板碑が現存しておれば建立の年を調べられるのにと惜んでおりますが、永い年月の間に心ない人により保存ができなかつた事は古い歴史に関心を持つ人々は残念でしょう。

移転した地藏堂には飯尾地藏堂と記されており、ひ



ひょうたん谷の地藏



ようたん谷の地藏さんの歴史は消えようとしていますが、この地藏さんの歴史は残したいものです。

### 飯尾古城門の地藏さん（古城門）

このお地藏さんは、お祀りした起元などは伝えられておりませんが藤井寺参道の谷川の東側の山裾を東へ天神さんに至る道路の南側に谷の橋から二十メートル程の所に祀られて居ります。

お地藏さんは台座ともで一米ぐらいでお堂はなく自然の中に座しておられます。

この辺の小字名を古城門と言う人と「こぜんもん」と呼ぶ人があります。何れが正しいかの判断はつきません。

然し里人に地藏さんの由来を聞きますと、いつ頃お祀りしたかは知らんけどこの地藏さんにお参りする人は、よう見かけるし頼事もよう聞いてもらへるのかご利益を受けた人がお礼に上げる「よだれかけ」がお首にかけるのがいつの間にか重なつて一年の間にはお顔が見へんようになるほど供えられとるけん。あらた



古城門の地藏

かなお地藏さんじゃと在所の人は言うどるんでよ。と話してくれました。

調べて見ましたが建立した年月は明かではありません。



## 庚神さん

### 飯尾岡の下の庚神さん

飯尾高の原地区内の岡の下に北向きの庚神さんがあります。(飯尾一九九二番地)

北向きの庚申さんは「あらたか」と大衆から信仰されます。毎年六月二十一日には庚申護摩がたかれ、大変な参詣人で市が立ち、広くない境内は人の群れでたいそうにぎやかなお祭りが行われていました。庚申の当日にも信仰心の厚い人びとが三三五五遠方から参詣に来ました。

願をかけてご利生を頂いた人から幟を納めたり、絵馬が納められるなどで信仰する人が多かったことを物語っていました。

こんな状態も大正中期までの事で、時代が変わり、医薬の発達に伴って、神仙への依頼心も次第に薄くなり参詣する人も少くなりました。

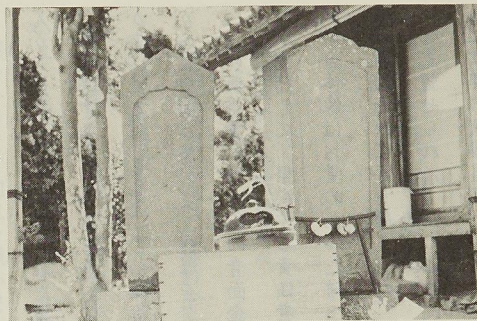
我国で庚申講の発展した時期は三百年程前からといわれていますが、この庚申さんの拝礼石碑を見ますと、一基は寛文五年、一基は寛文七年と記されておりますから、この庚申さんは庚申信仰の始った時代に奉祀された事が明らかです。

山川町婦人会が調査せられた同町の庚申塚でも、元禄十四年の建立が最古の塚で、飯尾の庚申さんから約四十年後に祭られた事になります。

飯尾庚申さんの歴史を探って見ますと、昔の庚申堂は二間四方で、境内に雄池、雌池の二つの池があつたと言います。この雌雄の池の由来については知る事が出来ません。庚申堂には庚申の夕方から信仰者が集って、護摩を焚き、経を唱えて庚申待ちの夜を過したと伝えていきます。

この庚申堂には木彫の青面金剛と金造りの青面金剛の二体が奉祀されていたのですが、この庚申堂が老朽して、祭祀する責任者も無かつたので崩壊したのです。そして木体の青面金剛は報恩寺に納め金体像はお堂のあつた跡へ埋て、処理をして拝碑が残ったばかりでありました。しかし大衆信仰は継続されて年を経ました。明治廿五年頃から藤本忠蔵氏が信仰心厚く、自分が祭祀奉仕を務たいと志望せられた。このことよって村の信仰者も熱意を持って庚申堂再建の議が起り、先ず発起人に京都の後藤益蔵氏、中郷から河野貞平氏、西郷から村橋某氏の三人が世話人になり、信仰心の





飯尾の庚申さん

厚い人や、世話好きの人を依頼して寄附集めの運動を開始せられたのです。

ところが飯尾だけでは事が運ばず、他村まで頼むには工夫しなければと、世話人の知恵で、村の子供を集めて芸を教え、いたる所で見物して貰ってその代償にいくらかの寄附を頂く事にしたのです。この策でかなりの目的は達せられたが何分にも多勢の人が参加したので、食費雑費などの経費を要した為に庚申堂は三間に二間の平屋建瓦葺となつたそうだ。だから別に庇をつけて祭壇を設け、祭具や備品を整えられた程度であつた。しかし庚申堂の新築再建が建成されたことから庚申祭事はもとに戻つて盛になつた

といわれます。

これは藤本忠蔵さんの子息、和夫君が御父から聞いた話でありますと伝えてくれました。

# 永らく埋れていた飯尾辰巳の庚申さん

飯尾のひよたん谷を南へ藤井寺に通ずる道を山裾に行くと、右への曲り角の北側に、この庚申さんは祀られております。

もどこの庚申さんは、山裾の道端に祀られたと思われます。お参り人も少かつた為か雑草に埋れて見る人によつては個人のお墓だと思われるような有様でした。そして、教度の道路拡張工事毎に移転を余儀なくされていた。気付く人も無く庚申さんも永い間淋しく過ごしておられたのである。

しかし今度石原福夫氏が新宅の建築に際して、お祀所を整備した所、参詣者もお賽銭や投時を供へる様になつて、信仰心の深い人々の世話で屋根を設け見事に復興出来ました。

これで飯尾の庚申さんは東の岡の下と、この西の庚申さんの二ヶ所となりました。この庚申さんは場所が藤井寺への参詣道にあるので永い間捨て置かれたぶんまでもとりかえし、これからは多くの人々に賑わしくお祀りせられることでしょう。

庚申信仰は庚申待とか庚申講など信仰する人々により大切に祀られて、庚申日に盛な祭りが行はれていた事が伝えられております。





古文書研究会員

ある書に、庚申さんの日は千支のかのえさるに当る日で、庚も申も金氣にして金氣旺盛で、天地万物の濁りたるものを変革し清肅する日なり。故に敬神日とされて、不浄事を忌は勿論、善人には大吉日なれど、悪人には我身を亡す大悪日ともいう。この日は身の先非を改め、善に移り向うべき日となる。とありました。こんな教えが大衆の庚申信仰の誘いになったのでは有りますまいか。

## 金比羅さん

### 敷地奥の金比羅堂

南地藏さんの南側を西へ唐谷を渡ると、道の北側に二間四方程の堂があります。ある人がこの堂は庄屋さんであつた新居家に建たのですと話されました。

この堂に金比羅さんをお祀りしたのでしょう。村の人は金比羅堂と今に称しています。昔は信仰の場であり、又在所の集会所にも使われていたのでしょう。この堂の前に南向きに光明真言の三メートル程のお石が立っています。

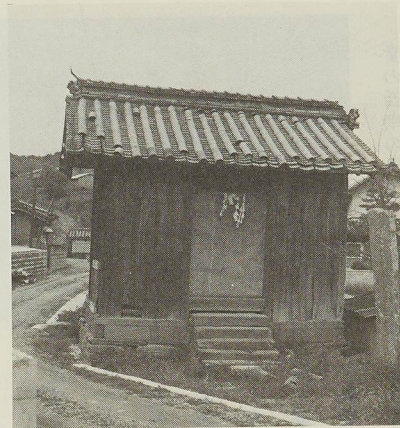
表に 奉供養光明真言百反遍 村中安全

安政三年三月廿一日建立

堂の西南の角に道に向つて小さな石のお堂に庚申さんが祀られています。台石に文化元年十月建



## 第四章 ふるさとの地名と伝説



金比羅堂

立奥組講中とあります。

昔の人は暮しの願事を祈ってお参りしたのでしょうが今は淋しそうにしょんぼりと気の毒です。それでもお賽銭が三つ四つ供えられていました。

こんなさ、やかな施設でも在所の人々が心のより所であり信仰の場として拙しい暮しの中で皆が力を合せて建立てきたのは人の心と心の結びつきの努力であり誠に貴重な施設だと思われます。



ふるさとの地名と伝説

## 飯尾

### 飯尾の唐人

私が飯尾敷地尋常高等小学校時代に、鴨島から志摩永太郎と言う先生がお勤めになっておりました。そして学習時間中に唐人の話をされた。

昔、支那からハタ織の技術をもった人が渡来して、この地で土地の婦人を集め、反物を織る技を教えて暮らしていたので唐人という地名が残った。と教えられた事を今に記憶しております。私の考えていたのは豊臣秀吉公が朝鮮支那に攻め入った時、蜂須賀侯が参加して、その時に技術のある者を連れて来たのであらうと思っておりましたが、そうでは無く、もっと古い歴史が有る事を知りました。

麻植郡郷土史によりますと、「人皇十三代成務天皇の朝、唐より呉部僕部と言う織縫人を召て飯尾



村に住す此地を唐人と言う」とありますから飯尾の平地部はすでにかなり進んだ生活が営まれていた事が想像されます。然るに、唐人という地名のおこりは意義深いものがある。

### 飯尾東の飛越え

飯尾東の持福寺を南へ六十メートル程行くと、東へ道が別れています。この道を東へ行くと、南に折れ、さらに東へ行くと森藤との堺の三谷川に橋がかかつて森藤へ通じております。昔は三谷川の堤防は今の様なもので無く、ほんの両側を土盛りした程でありました。従って橋があるのでもなく、この道を通る時は谷を飛びこえて通っていた。いともなく飯尾の人も森藤の人も飛びこえ飛びこえと称する様になった。飯尾村の飛びこえからいくのが近いとか早いとか言われていたのです。堤が改修せられ橋が架った事によって飛びこえる必要もなくなり、明治を過ぎ大正を過ぎて昭和となり、この飛越えの地名も消えなんとしていますので一筆認めました。

### 高の原開拓のこと

飯尾東部南端の洪積層高地は高ノ原と言われ、高台の上とこのすそを合せて四十戸が一部落とな

って自治会が結成されております。

この山地の高ノ原を開墾した歴史は寛永年間の初期、飯尾堀の飯尾川南岸高地に住居して居た深見又太夫源秀正の嫡男四郎左衛門が飯尾低地の水難を恐れて、昭和五十年から逆算すると、三百年前この地の開拓を意図して、鋤を入れ仮住居を造ったことにはじまる。

父第家臣協力して一鋤一鋤を下して開墾の進むにつれ、種子を蒔き、先ず食糧を得つつ、順次開拓して年とともに耕地を作り又子孫を得、逐次料地と一族を増加させたとあり。

また、四郎左衛門が入居後九十年を経て又太夫孫文左衛門の第市次郎が高ノ原の下東部に列居してこの周辺地の開拓に着手して山添低地部高所を見出して逐次開拓せられたと伝えられています。かような歴史を辿って開墾せられた上部の高の原での耕地は今では総面積四町歩に及んでおります。

### 飯尾の出口

飯尾の東部に「飯尾の出口」と呼ばれていた所がニヶ所ありまして、鴨島方面への通路として重宝なものでありました。この道も今は県道鴨島本名線となり出口の呼名も世界から忘れられており



ます。

飯尾川の状態は今と全く異なり、たかばしの上流二百メートル「かねもと裏といわれた」あたりからの下流は川幅も三十メートル以上で水深も深くて青々と水をた、えていた。江川水系との地下水連絡があつた為か冬期の朝は湯気が立ち、水温も暖かく附近の婦人は最適の洗濯場として利用したと伝えられております。

この川の橋の無かつた明治三十五年頃までの通行は、今のたかばし東わきに深見という家があり、その庭先を東へ回つて川岸にあり、深見に架けた仮橋をヒヤヒヤしながら通行は出来た。名西郡阿川辺の人々も鴨島方面への通行に利用したので飯尾の出口ニヶ所の一ヶ所はこの所を出口と称したのでした。

もう一ヶ所の出口は、たかばしから三百五十メートル程東の飯尾川が浅瀬になつておつて、川底がバラスで平水時ならば牛馬が通行しても踏込まないので荷物を運ぶ人も牛馬もこの所を通行しておつたのです。こゝを「渡り地」と称して唯一の交通路として物資の交流に役立っております。また川底がバラスで水が濁らないので夏には子どもの水泳場としても重宝でありました。川上の出口という地名もいつとはなしに出口に近い深見と河野の二軒が出口と呼ばれるようになりました。

明治三十二年二月十六日に徳島鉄道が鴨島駅まで開通したので、企業家の蔭山氏が名西郡阿川の持部鉾山の開発に着手して、この鉾石を鴨島駅に搬出する為に、森山の三谷から鴨島駅迄の道路改修を行いました。

この時に深見家の西側に道路を飯尾川に橋幅約三メートル長さ約三十メートルの新橋を橋脚と桁をみかげ石で橋板と欄干を桧材で当時としては見事な橋が竣工したのです。この橋を新橋と言ひ、高い橋なので高橋とも呼んでいましたが、今では徳島県地図にたかばしと印刷されているぐらいです。

ここに徳島鉄道鴨島駅が開通した年月日を書きましたので、鴨島以西の開通をも記録します。

鴨島から川島駅は明治三十二年八月十九日

川島から山瀬駅は 〃 年十二月廿三日

山瀬から川田駅は 〃 三十三年八月七日

川田から池田駅は大正三年三月二十五日

この開通時期調査は元国鉄職員松井竹男氏の担当



## 飯尾の番辻

飯尾の東部に県道鴨島本名線と名西郡の石井浦庄西麻植線との十字路があり、この四ツ辻を昔は番辻と称しておりました。

ここが番辻と言われたようになったのは、この辻に番屋と言って、今の駐在所の前身のような住民の安全を守り、犯罪人の調べなどをおつたさ、やかな番屋があつた事によるとの言い伝えであります。

この番辻と言う名称は飯尾地区目標の役目を果しておりました。

村外で飯尾だと話すと、そんなら番辻のどの辺ですかと、この番辻が村外でも目標にして考えられておりまして地名としての役目をしていました。

今ではこの事も次第に忘れられてしまつて、土地の老人たちは、何だか飯尾の土地の一部がなくなつた気がすると話す人もあります。

## 飯尾の呉郷

飯尾に新たに呉郷という地区が生まれました。これは飯尾の南山麓にあつた五反田・立石・天神下・南沼・二反田・松の本・二つ森の七つの小字名の土地が徳島県と鴨島町の計画で住宅団地造成計画によりできたものであります。

この団地の面積は十七町歩で工事着手は昭和四十三年で完成は昭和四十五年十一月でありました。完成の式典は十一月七日同地で開催され、武市徳島県知事、川真田鴨島町長始め関係者、用地提供者など多数参列してはなばなく行われ、その席で造成地区の名称を呉郷すると発表せられました。

このような宅地に造成せられた土地も永年にわたる祖先の大きな労苦によつてつくられたものであつて、簡単にこの記録をどめることによつて先輩の功労をたたえたいと思います。

この地域は大昔は吉野川が流れていたところであつて、この吉野川の旧河道を飯尾に居住した祖先が一步／＼苦心して開拓した事は何人も認めるところであります。

明治年代になつてからでも、祖先の苦闘をついでさらに逐時改良仕事を重ねて耕作価値の向上に、



汗と油の努力をつづけてきたのでした。

特に太平洋戦争時に、食糧増産の為に、この一毛田を二毛田にしようと、農家非農家を問わず、学徒までも動員して、農道の整備、排水路の新設、または灌漑設備など土地改良に、無数の人の労力を投入した結果、南沼の米は美味だとか、反収三石は収れるとか言われる程の米作地に完成したのでありました。

然しこんな土地柄でありますので、祖先のこれ等の開拓努力にまつわる伝説と思われる話や、また事実だと思われる話が残っておりますのでその一部を取上げてみます。

ある年の田作り作業に、牛を使って田を掻いておりました所、急な用が出来た。牛をそのままに帰宅して、用を達して田へ戻った所、使っておった牛が居らなくなってしまいました。隣人に頼んで探してもらったが逐に見つけ出せなかった。ところが数日の後に向麻山の北麓水神に牛が出たとの評判が立ったので、もしやと思って見に行ったらところおらなくなった牛がいたので連れ戻ったと言う伝説があります。

このような沼の深い田でありますので、田面から一尺ぐらいの底に松丸太を敷いて、深く踏込まぬよう、作業がしやすいように設備した所が数々ありました。

またある年、旱害と洪水との二重の大被害を受けて漸く二割か三割かの収穫が得られるかと暗い気持ちでいた矢先に、ある晩に鴨の大量が襲来して一夜の中に残っていた稲をみんな喰いつくし、遂に無収穫になったと言ひ伝えられております。

この話は、大正の頃でも年によつては、鴨の襲来があり、多少の被害があったので、熱心な農家は鴨の被害を防ぐ為に夕方から夜にかけて竹竿を持って田に出かけて鴨追いをした実例があり、事実であつたと思われます。

以上のような土地も、当時の所有者が町の発展施策を理解して協力した結果造成が達成せられたのであります。ここに自治省指定により、鴨島町がコミュニティ、センターを昭和四十七年十一月に建設開館し住民融和の殿堂も竣成し、昭和五十二年には八百戸に及ぶ住宅建築の完了をみるに至ったものであります。

### 飯尾のひょうたん谷

飯尾西部にひょうたん谷と呼ばれる谷川がある。降雨期には大水が氾濫して、毎年大きな水害を与えて住民を泣かせたのであります。平時には水も清く、魚貝類が住み、住民生活に風情を添え



る。減水すると、子供は谷へ下りて魚を追ったり、貝類を拾ったり、随分楽しい遊び場として子供を悦ばせたのでした。

この谷川は飯尾前山に水源を発している。藤井谷、天神西谷、天神東谷、高の原谷が山を下った麓で合流して、それから下って宮前地区で、敷地から流れてきた呉谷とも合流、北へ流れて飯尾川に流れています。

しかし、その谷川は、昔の道路整備が出来ていない時代は、物資の運搬港として貴重などころでありました。昔は人の肩を使う外に方法がないので、水の便を思いつき、この谷へも、飯尾川から舟をのぼらせて物資を積出したり、住民の必需品を搬入したりして、水害のお返しに、便利も与えられたのでありました。

このように利用する為に、荷物の揚卸作業の便利を考え、谷に人工を加えて整備した。そして谷の形がひょうたん形になった所が出来たのでいつとはなくひょうたん谷の名称が生れたのでしょうか。県道から南一〇〇メートル程の、谷の西側に「舟どぎ」という屋号の家があります。この舟どぎの名も舟溜り場に、何か縁があるように思われ、この辺が荷物の揚卸場であつたのではと想像されます。

もう一ヶ所ほかにも荷揚場があつたと古老が伝えます。このひょうたんだにの飯尾川に接した所から、上へ六、七〇メートルの飯尾川南岸に、「因」という屋号の家があります。この辺も荷揚場であつたと伝えております。

この谷も住民が家を建てたり、耕地を少しでも広くしたいと、明治初年頃、谷の兩岸を石積に改修したと伝えていきます。

昔の人は大水の場合は、水害を受けるのが当然と思つたのでしよう。水害を少くする為の考慮が払われずに、上流から五本もの谷水がくる水量を考えず、現在のように、一本の谷水しか流れない企画で、兩岸の石積を施工した事は残念に思います。

その時代の進展につれて、この谷の改修が数度行われましたが、谷中や水深などは改良にどどまり、根本的な改修は達成されていません。従って、水害は減少されないうまで今日に至っております。

今一つ、この谷の水害を大きくしているのは、明治四十三年頃、麻植郡の東部から、名西郡一体にかけ、農地灌漑の為につくられた麻名用水路とひょうたん谷との交る所の施工であります。

夏から秋にかけての洪水季に大水の出るひょうたん谷を軽視したのか、後から作る麻名用水路の



下に潜らせ、わずか排水土管三本を埋設して麻名用水工事を行った事です。かかる横暴極まる一方的な行為が行われたものだと思われるのです。この工事は平時のひょうたん谷の流量を考えたもので、大水時の水量の状況は少しも考慮されていないのです。時の村人は声を大にして反対を強く訴えたがいられず、結局は麻名用水の思うがままに工事を完成したのでしょう。

この一方的な工事に関係住民は納得できず、その後の為政者、用水事務所に改善策を度々交渉した。しかし僅かに暗渠の拡張をするほどで、目に見えるような被害減少の施策は取られず、今日に及んでいます。

永年にわたる飯尾ひょうたん谷と麻名用水路の交さによって、飯尾住民にあたえた水害による損害を思い起こすと、肌にあずかる心地が覚えるのです。

このひょうたん谷も今は公的には藤井谷川と称されていますが、住民が昔から呼び馴れたひょうたん谷の呼名は消えそうにありません。

## 飯尾西郷

一般に飯尾西郷とよんでいるのは、ひょうたん谷から西、飯尾敷地小学校西側道路までの間と、

北の飯尾川から南山麓にかけての地区をいう。

この地域は二千年の昔、人の住居した事実を物語る土器が飯尾神社周辺から、小学校敷地からは土器の破片が発掘されている。(参照7ページ) 従って、飯尾では最も古くから、農耕生活が営れていた地域でもあります。

飯尾神社南附近にはこの地方を治めていた飯尾家の館が雄々と構えられていたことは確かであり、境内南添いに鎧が発掘されたという鎧塚があります。その南方に若宮神社があり、それから東を「宮の前」と南に「殿原」という地名が残りました。それから南の藤井寺参詣道の山麓に「古城門」の地名があるが人により古禅門とも言っている。

県道より北を「北門」と言い、北門の中央部東には妙見さんが祭られていたというが、今はその姿は無い。

また小学校々庭の中に観音さんが祭られていたといい、飯尾川の南側には舟つき場があったと伝えられることなどから、西郷は早くから文化の進んでいたことが想像できる。



## 飯尾七軒屋敷の伝説

むかし、後醍醐天皇は足利尊氏との戦いに破れ、大和の吉野に落ちた。公達も京の都をのがれて、再興の機を待ち来る。若宮家は代々天皇家の守護役として仕えていたが、一族郎党を引連れ、讃岐の細川候へ身を寄せた。しかし、足利の勢い強く、ここでもやむなく二手に分れて、伊予と阿波へと落ち逃れることになった。途中の美馬郡祖江谷にて、足利勢の討手に出合い、相ついで戦士者がでた。残りし者は剣山の山奥、木屋平、一宇村の山中へと。また東へ東へと落ちた照彦公等は老家臣の孫之進に守られて当地に來り、草原を開墾し、館を築き忍んだと老人市村純遠氏は語るが歴史的事実はさだかでない。なぜなら当地はすでに相当な権力をもった支配者がいたといわれる。

また飯尾氏の地頭時代と時を同じくし、飯尾氏は足利軍に加戦しているのであるから、このようなことは不可能と思われるのである。

しかしながら、いずれにしても館があつたことは確かであろう。これを七家屋形と言い伝えられ、元禄の頃より「七軒屋敷」というようになったと伝えられる。

また、館の北門側を「北門」とよびこの地名が残った。そして、一族が愛ぜられていた花畑を「殿

の原」といい伝えられた。「宮の前」という地名は一族が若宮親王を御祀りしていたそうで、この館の前だからそうよばれるようになった。従つて若宮神社ともいわれる。

## 飯尾敷地小学校が生れる

わが国の学校は明治維新までは、寺小屋といつて、寺の広い部屋を借りて、青少年の教育の場としていたのです。この寺小屋は飯尾にも敷地にもありました。特に飯尾の持福寺にあつた「居陸塾」は近郷はもちろんのこと県下各地より、生徒が勉学に集つていたといわれています。敷地村には河辺八幡神社境内にあつたといわれています。従つてこの地は教育は盛んであり、麻植郡東郷学校があつたといわれています。

明治になつて、太政官布告は平民には苗字も許され、それに伴う新政治組織は教育制度も大きく変化させるにいたつた。明治五年学校といわれる小学校が各地に建設されたのです。

飯尾村・敷地村は子どもの人数が少ないので両村を合せて、飯尾敷地小学校という名前を付け創立する運びになつたのであります。しかし、今も昔もかわりなく、自分達の村に小学校をとるという事でなかなか位置が決りませんでした。特に富豪家は現在どちがい大へんな権利があり、そし



て大きな村のできごとの大部分の経費を提供されるので意見がまとまらなかったのです。敷地村の須見千次郎氏は自分の土地を学校へ提供し、費用も出すと言われるし、飯尾の代表者も敷地よりは飯尾村が大きいのだから学校は飯尾へということ、ついに飯尾と敷地の境へ建てることになったのです。はじめは工藤実衛氏のところに決まっていたが、水害の心配から、北門の観音堂地へということでした。

このあたりは神社地の森であり、あたりは草原で子供の遊び場としても最適でありました。このように学校建設地問題もおさまり、明治二三年頃に小学校が建設されたのであります。時代はずっと後になって人の心は変わらないのか、鴨島と川島との合併問題で斤舎の位置問題で同じようなことがおこり、ついに失敗したという苦い経験がありました。年を取りて思うに、ゆずりあう気が、人の世をつくってゆくのだと思えば大切にしたいものです。おかげで飯尾、敷地の合併はスムーズにいったそうです。

市村純逸

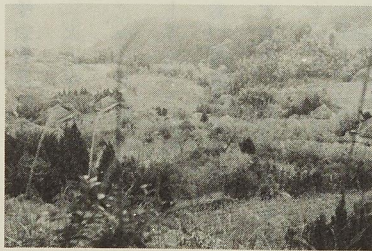
## 敷地

### 樋山地のこと

#### 樋山地の由来

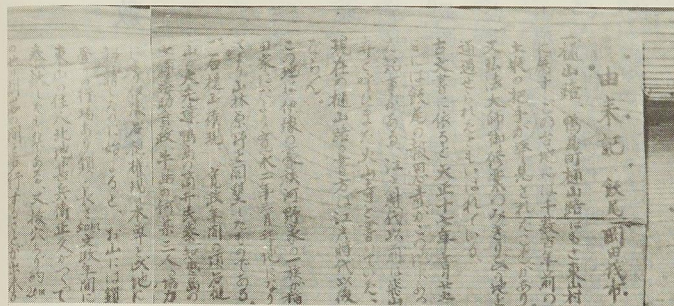
敷地の南方山地に長戸の在所がありその西側に添うて樋山地があります。最高地の標高は五八〇メートルです。昭和三十年に鴨島町へ編入合併までは東山村の行政区画でありました。

然し、樋山地は東山村の東端で、村の中央への交通は敷地へ通ずるのが近く、便利なのです。明治七年小学校創設以来、子どもは飯尾小学校へ通学していましたが、飯尾敷地と樋山路との住民交流は東山村よりは深いようでした。



樋山地の里





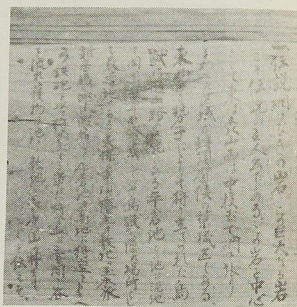
石槌神社に納められていた岡田茂市氏の由來記

槌山地という地名文字は蜂須賀藩政になってからで、それまでは「飛山寺」から「火山寺」になったと伝えられています。

ある書ではるか遠いむかしから、さいはての地にも人は住み日々のなりわいはあつたとかかれていました。が、槌山地にもこの文章のとおり、なるほどと思われる伝説が残っております。

#### 報恩寺の伝説

弘仁のむかし、弘法大師が焼山寺へ登られる道すがら、この地を通られると、赤子の泣声が入ったそうです。声をたよりにそこそこ探すと、谷縁に、赤子を捨てられているのを見つけて抱きあげたのでした。大師さまも旅の道中ではあり、施すすべもなく、泣子を抱え、人家でもあればよいのにと気を配りつゝ、進ん



明王の像を守り本尊としてその子も成人して独立の生計を営むようになりました。

そして、今日自分があるのはお大師さまと、育てられた人の深い恵によるところと感謝の念を忘れませんでした。この深いご恩に報いねば人ではないと、意を決して頭を丸め、さ、やかな堂宇を建てたそうです。そして、大師より頂いた愛染明王をご本尊としたのです。寺名は恩を報ずる心を表現して報恩寺と名づけたといわれます。誠に、うるわしい伝説であります。

この寺は後年になり、飯尾に移して、今では多数の檀家を得て衆生のために栄えております。

#### 河野氏の開拓

以上のように、住む人が極めて少なかったこの地も、蜂須賀藩が治めるようになり、寛永二年藩

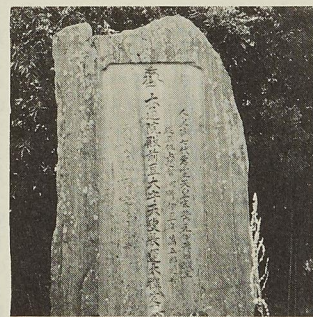


主の許可を得て、伊与の豪族、河野家の子孫が入居して本格的な開拓が行われるようになりました。伊予国で隆盛であった河野家も、時に利あらずして衰微した後、阿波蜂須賀家の城代家老稲田氏をたより、阿波に来り。藩の森水軍に参加して小松島中田に居をさだめて年を送っていたが、河野市兵衛の代に一族を伴い、樋山地に住地をかねて、開拓にかゝった。そして、開拓のかたわら武道の道場も建設して、武を錬り、蜂須賀家に事ある時は忠勤を励むべく、最盛時には五、六十人もが道場で稽古に励んだと伝えます。

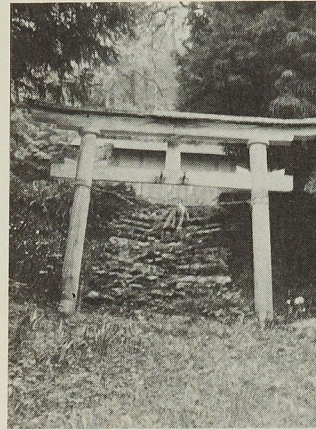
この河野家入居の事は河野家代々の菩提寺の飯尾持福寺の過去帳や住職の話、または河野家の末帳や住職の話、または河野家の末孫など語るところであります。

樋山寺も人家も三十戸に発展しましたが、終戦後の社会状態の変化で、生活の為に山を下りて今では僅かに五戸で、主に老人が残って静かに生活を営んでいるあります。

明治から大正にかけて、東山鉾山、枝部鉾山、広石鉾山など採鉾の盛んであった時、樋山地でも鉾脈を探して試掘が行われましたが、この地での鉾山採掘は鉾脈に恵れず中止され、今は抗口を



河野氏の記念碑



東山鉾山2号鉾あと

残すばかりであります。それでも今では道路の改修が行われ、在所の軒先まで自動車が行き来できるようになっております。

この道路側に一際目につく碑石があり、河野家の歴史と祖先崇拜の誠心を残しています。碑石は、高さ二・三メートル、巾一・三メートルの立派なもので碑面に

大通院殿前豆大守天叟長運大禪定門

天正十八年寅三月二十九日逝去

河野一族建立

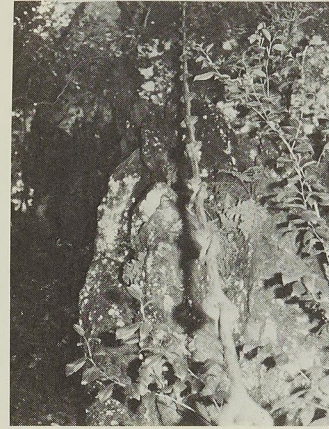
入居の先祖河野市兵衛、寛永二年から四十三年後にこの地で死亡しております。

樋山地と石槌山



樋山地に石槌権現社が祀られています。信仰者も広い範囲にわたって、夏の祭典には現在でさえ多数の参拝者で賑うのである。この権現さんは寛政年間、今から百八十年程前に、伊与の石槌神社の大先達であった知恵島の七条勝助、鴨島の箇井民泰、牛島の某氏の三人が協力してご神体を持ち帰り、現在の地に奉祭したのがはじまりであると伝えていきます。然しその後、伊与の本宮から異議があり、ご神体を返して、現在祭祀のご神体と交換したとも伝えております。

石槌権現社は木材ながら鳥居を構え、石段を上ると、拝殿中次本殿と大規模では無いが神社としての施設は整えられています。拝殿の前を北に廻って登ると、大きな岩にかけられた鎖昇りの行場があります。



石槌山の太岩とくさりの行場

この鎖は文政年間に東山の住人、北池与兵衛が自力で奉納したものです。鎖の長さは五〇メートルで、上段の鎖つなぎの厳は下段の取付岩からの岩相がつづき、巨大な見事な形状をしています。

このもかに、セリ割、覗き石、不動石などがある。

蝶須賀藩では上段のつなぎ岩を中心として、東ら森山、

西は中枝迄の間を藩主の獵場として、綱を張渡して禁獵区に指定していたとの事です。

樋山路の石槌権現さんは川上のような歴史を持ち、また鴨島町内でのハイキングのコースとして活用すれば、最適のところと思われるので信仰者の熱意で境内や堂宇の整備と改修を望むものであります。

#### 樋山地の八幡神社

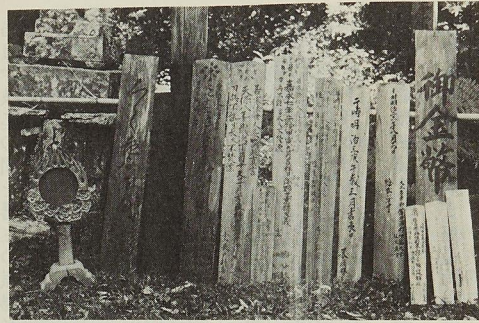
この八幡神社は現在の境内より石槌さん寄りの方にお祀りしてありました。社の裏に馬道があり、この道を荷をつけた馬が通ると、その馬に異状が起つて馬が倒れる事が度々ありました。四国霊場第十番の切幡寺でも、本尊の千手観音さんが非常にあらたかで、吉野川を通る舟が切幡寺さんの真南にかゝると、舟が進まなくなった話があり、これは観音さんのご威光が強いのではあるまいかと、観音さまのご座を北向きに変えると、その後は異状がなくなったとの伝説にちなんで、八幡さまも何か障りがあるのかも知れない。これはお社を移転せねばなるまいと氏子の意見も一致しました。さてどこへお社替えをしたらよいかと、思案しましたが、各人の意見がまとまらなかった。それで、八幡さまのご意向に従う事にしよう。それには今の神社で供物を供え、祝詞を奏して、神参を上げてから、神社から神参太鼓を下へ転がして、その太鼓が止った所が八幡さんのお望みの社



と決めるということに一決したのであります。

そこでどうぞお望みの場所をお指示下さいと、太鼓を転がすと、現在の境内に太鼓が止つたのでした。この場所に新に社殿を造営してご神体をお移したと伝えております。

然し新社殿もわずかの戸数の力での造営でありますから、立派とは申しかねるものです。参詣し



八幡さんの棟札

て目につくのは、杉の古木が二本、空高くそびえておることで、余りにも見事なので、巻尺を当てて見ますと、社殿北側のは樹周が五メートルもあり、南側にあるのは四、五メートルで何れも樹高は三五メートル以上と目測致しました。このような古木は県内でも、珍しく、いつまでも保護いたしたいものです。四国八十八ヶ所霊場の二番霊場極楽寺に弘法大師が植えたこと伝えられる大きな杉の古木があり「大師御手植長命杉」の標示が立っている。木のまわり約五メートルで県の天然物に指定せられているようです。

この古い杉と樋山路八幡さんの杉とを比較して考えると何とか

保存の手段を考えねばと思われれます。樋山路の氏子の間ではこの木を売って社殿の改築と道路の整備をしたらとの意見もあり、又大切に保存せねばとの説もあるとき、ました。



地理にみる地名のいわれ

## 飯尾の地名

**唐人** 唐の人が来住したとの伝説が強いが、こゝは麻名用水に沿った所であり、旧吉野川の河流であるところから、やはり、ゴーラ処で石のごろごろした河原の処の意味であろうか。

**福井** 川沿いの肥えた土地とかふくらんだ土地につけられる地名である。飯尾川と麻名用水がふくらんで北に丸く出ている中側にある。

**殿原** ドバの意 あて字である。殿郷（鴨島）殿場（上浦）にもある。

**飯原** 井原の意で水路に恵まれた野原。

**飯尾** 井野の意で水路の完備された野、米作が出来る水が便利などところで全国でもよくみられる

地名。

**藤井谷** 藤とは藤花の意味でなく、地名用語では古語で下ること傾斜すること。全国的な地名井は水路のことで、傾斜地の水路のある谷のことである。その証拠に藤井寺 とはいわない。地名

のいはれとして、藤井寺は藤の木のある寺だから藤井寺と命名したといわれるが、もし寺名が先ならば藤井寺谷と地名がされていたはずである。大阪の藤井寺や高知の藤井山岩本寺なども傾斜地である。富士山のフジも同じ意味をもつ。

**古林の裾** クリスのあて字であろうか。クリスとは地名用語で屋根の上の岩礫などのあるところ

でこゝの地名としてピッタリする。  
**獅子舞** シシとは昔は猪や鹿のことをいったもので、この辺りはよく猪や鹿が出たからつけられた地名であろうか？

**端山** ハバとは崖地につけられる地名で、ここもそんな地形である。

## 敷地の地名

**敷地** 元来の意味は川の運んで来た土砂や礫で出来た土地のこと。ここは唐谷川が運んだ扇状地である。



**雨足** 唐谷川の西の方の湿地帯で雨足神社も北の方にあったところ。地名用語でアは湿地。メは

水のこと。アシは葦の生えているところの意であるからこゝに通じた地名である。

**鳥取畑** ドロ畑のあて字かドタのあて字で、トダとは湿地、湿地の意である。ここは唐谷川の屈曲部で提防が完備していなかった時は雨ごとに水が流れ込んで滞っていた土地である。

**山王** 山王神社のあるところにつけられる地名であるが、神社があるなしにかかわらず、狭い野のところにつけられているから、神社は後にできたものであろう。サノ（狭野）のことである。全国では何百と数える地名である。

**黒岩** 黒とはこの一帯から産出する蛇紋岩が黒いためこう呼ばれるようになったが、大部分はクラの意味では崖のことである。町内にも二ヶ所あり、県内にも数ある。

**赤坂** アカとはいろいろな意味に地名としてもつけられているがここでは赤い色のことであらうか。

**正延** ショーブのあて字かシブのあて字である。ショーブとは菖蒲の生えるような湿地。シブはシブ地でこれも同様にシブケタ土地のことである。県下でも数多い。

**桜窪** 桜とは桜の木の意味もあるけれども、地名用語では大部分が迫（サコ）即ち、狭いところ

の意であり、こゝも唐谷川に山が迫ったいわゆる狭ばったところである。

**円生** マセで狭い谷や狭い屋根上に見られる地名。ここは唐谷川に沿った狭い谷である阿波町では真重にあて字されている。

**滝倉** 滝とは地名用語で断崖・急激に水の落下する谷地などの意味である。ここもそんなところである。

**唐谷** 唐からきた人の住んだ所との伝説もあるが、地名ではゴーラ谷のことで岩の多い谷のことである。

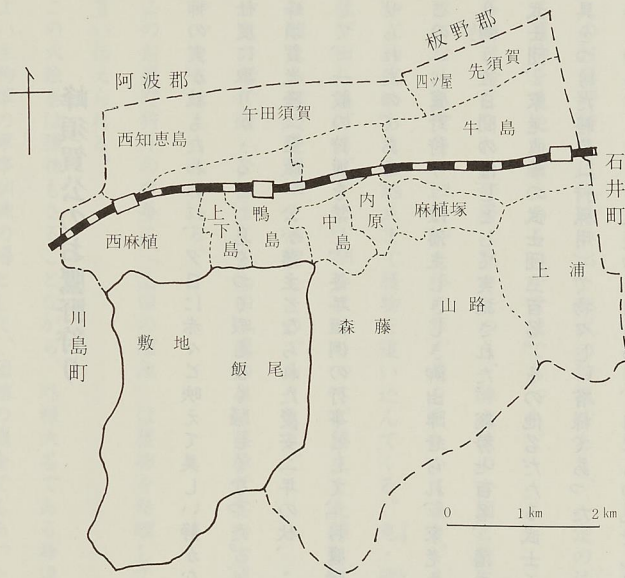
**呉谷** これも呉人の居住したなどの伝説につながるがこれもゴーラと大同小異である。クレ石の多い谷のこと。

**長戸** 頂上の意味であらうか、ここも山頂の所にある小部落であつた。

**樋山地** 樋とは水路のことで、水路のある米作が可能な山地のことである。



鴨島町字別図



- |        |     |      |     |     |     |
|--------|-----|------|-----|-----|-----|
| 井堰     | 赤坂  | 新林   | 滝倉  | 長戸  | 樋山地 |
| 長原     | 梅ノ宮 | 正延   | 雨足  | 四ノ宮 |     |
| 呉谷     | 山王  | 平山   | 桜窪  | 円生  |     |
| 鳥取畑    | 竜丁地 | 八反地  | 宮ノ北 |     |     |
| 敷地地区小字 |     |      |     |     |     |
| 獅子舞    | 西端山 |      |     |     |     |
| 古林ノ裾   | 天神  | 高ノ原  | 東端山 |     |     |
| 二ツ森    | 天神下 | 藤井谷東 | 藤井谷 |     |     |
| 飯原     | 立石  | 南沼   | 松本  | 川原尻 |     |
| 宮前     | 小原  | 辻    | 原緑  | 殿原  |     |
| 唐人     | 北門  | 福井   | 堀   | 溝緑  |     |
| 飯尾地区小字 |     |      |     |     |     |

諏訪原の旧地名について

飯尾の東端に公称福井という小字の地名があります。この辺を昔は諏訪原と称しておりましたので何かの原因があると思っておりました。村人に問い合わせても答が得られませんでしたので隣接地の中島に、古くから住居しておられる井上秀太郎さん（元校長）の話でやつと次のことが判りました。

現在の中島に祭られている諏訪神社が元はこの諏訪原に鎮座してあったそうです。ところが慶応元年、寅の年の大水に、飯尾川を北へ流れて北岸に止った。そこで村人はお神さんがこの場所がお気にめされたのであろうからと、この場所に社殿を復旧して、氏神として信仰するに居たつたそうです。しかし大正一二年四月に社殿を新築するに際して、現在の中島字福井に移転されたということです。そんな次第で諏訪原という名称が残ったのでしょう。明治三十年頃までは宮跡が残っていたそうで、昭和二二年まで古塚もあったそうです。



## 蜂須賀公のお鷹野狩り

柿の実が枝もたわわに、夕日に赤々と映えて美しい静かな平和な敷地村は、秋の穫入れも終つて冬仕度に取りかゝると、息をつく暇もなく騒しくなった。

蜂須賀光隆（至政）公が藩主となられた慶安二年の秋、この静かな村に山奉行を置き、禁猟区域として、一般の狩猟を禁じ、毎年恒例の行事として、「お鷹野狩り」が行なわれ、村人達にも使役が命ぜられたのである。

この「お鷹野狩り」は藩主じきじき御出陣せられ、家老生駒丹後守が総指揮をとり、十一月十日より向う五日間の催しとして実施された。総勢七百名、藩主護衛の親衛隊（伊賀者も含め）五十名の武士団、家老直参の武士団三百名。その他名だたる武士五〇名は騎馬にうちまたがり、兵は各々武器をつけた軽装（狩猟用）で物々しい有様であつた。

藩主御馬前における大獲物を射止めて、目にも見せんと、夜も明けきらぬ朝まだき、五時おき

して、ホラガイの合図と共に、勇躍出陣して行つたそうであります。

このお鷹野狩りは「追い山」形式の狩猟であり、一定の法則に従い遠巻きにした円陣を次第に縮めて獲物を追込み射止めるのが常法であつた。

各隊は命じられた部署に黙々とつき、陣太鼓の合図と共に一せいに行動を起し、兵（追手）一列横隊にならんで各々に持った棒で草、柴をたたいて追う。また太鼓、鐘、ドラ、ときの声などであらかじめ定められた地点まで獲物を追い込んでくる。兎・鹿・猪・狸等がおり場を失つて、たくさん飛び出し逃げまどうと、期をはからつて、藩主を先頭に五十頭の騎馬隊が行動を起し、獲物を次に射止め狩の醍醐味を満喫したのであります。

古老の話では「ひやまじ」「山田」「鷹の巢」篠原紫雲の古城「上桜城趾」が特に追山として獲物が多かったと伝えられている。

このお鷹野狩りの度毎に、「山田の溜池」は獲物を処理して洗つたため、水が血の色に染まつたとも言ひ伝えられる。

この大絵巻は獲物もさることながら、外様大名である蜂須賀藩がお鷹野狩りにことよせて、ていのよい生駒軍の軍事訓練の場として、団結の機会でもあつたのである。



## 大庄屋新居家の接待

お鷹野狩りの総勢をお迎えし、これを賄う村は想像に及ばない労と資材の提供をよきなくされた、当時、敷地村には大庄屋新居家があり、森藤村より上下島村を含む一三ヶ村の組頭をしていて、一際の接待を賄ったと伝えられる。

もともと新居一族は阿波山獄武士の一族であり、阿波蜂須賀藩はいわゆる隠し田、隠し兵によって力を備えていたもようで、新居一族もまた家老生駒丹後守に従属する隠し兵であったそうである。日常は農作業に従事するかたわら、力石、角力、剣術、槍術、馬術を広大な屋敷内で万一にそなえひそかに訓練をしていたとも伝える。

さて、新居一族は毎春秋の獲入れが終ると、各々家、屋敷を大掃除しなければならない。特に主家の（玉木屋）は三町四方の屋敷をかまえていて、三百畳の大部屋でもあったことから、藩主のお成りの日には御座所となり、御寝所ともなった。このときばかりは防備も厳重を極め、召使いの者も自由に出入りが許されず、格子戸でまじきられ、奥への出入りは家人以外出来なくなるのである。玄関口は貴賓口と通常口の二つあり、（貴賓口は通常閉されている）貴賓口を入ると、玄関両側に十

畳の間があり、藩主の護衛の武士の詰所控室となった。玄関正面身付けの壁には長押がしつられてあり、槍十本が掛けられた三十畳の間があった。そこを通ると次の間が上下五十畳の部屋があり、上の間が藩主の御座所となる。また小姓・近親の者の御寝所でもあった。この部屋の床はどんでん返しの仕掛けがあり、そこを出ると一間四方の金庫と独立した茶室へと続いていて、安全に逃避できる装置がなされていた。一方下の間には名だたる武士が泊られた。雑兵は屋敷上段の一町にあまる酒倉数軒に分宿し、酒盛りなどに興じて、鋭気を養ったそうであります。従って、これだけの炊き出しは繁忙を極め、新居家では出入りの者三百数名、案内接待役五十名をかり集め、これにあらった。

またこのお鷹野狩りには、新居一族にも参加が許され、家印の「国」〓かくたまの幟を押立てて、五十名の兵をくりだしたそうである。

その後、玉木屋は十二代の新居林兵衛の当時、隠居所として少し山深い「黒岩」に別宅を建設し、武徳殿を備えた屋敷を加えた。武家屋敷のけあきの木で作られた大門をくぐると、両側に警固部屋として、各二十名の供のものの控室があり、広大な庭には右手に三十数頭の馬つなぎ場と左手に馬小屋を配していたという雄大なものであったといわれる。